佐久市埋蔵文化財調査報告書　第102集

枇杷坂遺跡群

円正坊遺跡Ⅳ

（えんしょうぼう）

長野県佐久市岩村田円正坊遺跡Ⅳ発掘調査報告書
（弥生時代後期墓址、古墳・平安時代集落址、他）

2002．3

佐　　久　　市

長野県佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第102集

枇杷坂遺跡群

円正坊遺跡Ⅳ

（えんしょうぼう）

長野県佐久市岩村田円正坊遺跡Ⅳ発掘調査報告書
（弥生時代後期墓址、古墳・平安時代集落址、他）

2002．3

佐　　久　　市

長野県佐久市教育委員会

円正坊遺跡Ⅳ航空写真（平成11年８月撮影　みすず航業）

円正坊遺跡Ⅳ近景（北方より南を望む）

円正坊遺跡Ⅳ近景（東より西を望む）

円正坊遺跡Ⅳ近景（北東より）

円正坊遺跡Ⅳ全景（平成11年度、南より）

円正坊遺跡Ⅳ全景（平成11年度調査、西より）

円正坊遺跡Ⅳ全景（平成11年度調査、南西の遺構群）

I地点全景（西より）

H地点全景（西より）

K地点全景（北より）

D・J地点全景（東より西を望む）

例　言

1．本報告書は、佐久市岩村田字円正坊地籍において平成11年度から平成13年度にかけて行われた都市計画道路佐久駅鄽科口線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2．発掘調査は佐久市都市計画課の委託を受け、佐久市教育委員会文化財課が担当した。
3．本書に掲載した地図は、建設省国土地理院発行の地形図（1：25,000）、佐久市発行の基本図（1：2,500）を使用した。
4．発掘調査は森泉かよ子が担当し、土器実測は堺益子が担当した。本書の編集・執筆は森泉が行った。
5．航空写真・全体測量図はみすず航業に委託し、それを使用している。
6．自然科学分析・鑑定はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
7．須恵器の胎土分析は（株）第四紀地質研究所に委託した。
8．本遺跡の遺物等の資料は佐久市教育委員会の責任下に置かれている。

凡　例

1．遺構の略号は次の通りである。
　H－竪穴住居址　F－掘立柱建物址　D－土坑　P－単独ピット　M－溝址　SM－周溝址
2．挿図中の遺構の縮尺は原則として1／80である。異なる場合は明記してある。
3．挿図中の遺物の縮尺は1／4である。異なる場合は図中に明記してある。
4．挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。

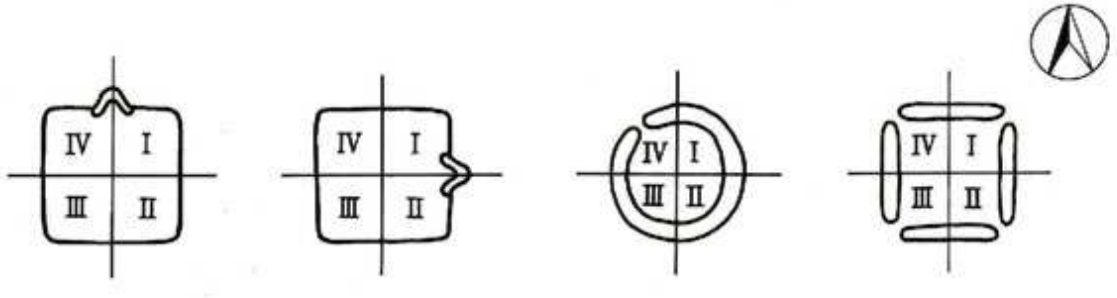
遺構

地山断面　焼土　粘土
柱痕　垣方

遺物

須恵器断面　黒色処理　礫
赤色塗彩　釉

5. 遺物の出土地点は下図の遺構分割によるものである。



6. 本地籍は地殻変動を受けたため、一つの遺構が水平方向に移動していた。ズレが確認できたものは平面図の元位置あたる所を緑線で示した。

目　次

巻頭図版
例言
凡例
目次
第Ⅰ章　発掘調査の概要……1
　第1節　調査の経緯……1
　第2節　調査体制……2
　第3節　調査日誌……2
　第4節　調査結果の概要……5

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境……7

第Ⅲ章　基本層序……11

第Ⅳ章　遺構と遺物……13
　第1節　竪穴住居址……15
　第2節　掘立柱建物址……96
　第3節　単独ピット……111
　第4節　土坑……113
　第5節　周溝址……115
　第6節　溝址……122
　第7節　グリット・表採遺物……125
　円正坊遺跡Ⅰ……127
　円正坊遺跡Ⅴ……141

第Ⅴ章　総　括……150
　第1節　弥生時代……150
　第2節　古墳時代……153
　第3節　平安時代……164
　第4節　まとめ……165

引用参考文献……166
付表　遺構一覧表……167
付編……177
　円正坊遺跡から出土した炭化材・炭化物の同定　パリノ・サーヴェイ……177
　土器胎土分析業務
　－円正坊遺跡Ⅳ出土の須恵器胎土分析及び報告書－　（株）第四紀地質研究所……186
　　付　図　1～9
　　胎土分析土器図版1～4
写真図版

挿図目次

第1図　円正坊遺跡Ⅳ位置図……1
第2図　円正坊遺跡Ⅳ遺構配置図　……6
第3図　円正坊遺跡発掘区設定図……7
第4図　周辺遺跡分布図　……9
第5図　円正坊遺跡周辺地形図（1：10,000）……10
第6図　基本層序模式図　……11
第7図　円正坊遺跡Ⅳ全体図（1：400）……13
第8図　H1号住居址　……15
第9図　H2号住居址（1）……17
第10図　H2号住居址（2）……18
第11図　H3号住居址　……21
第12図　H4号住居址　……23
第13図　H5号住居址　……25
第14図　H6号住居址　……26
第15図　H7号住居址（1）……28
第16図　H7号住居址（2）……29
第17図　H8号住居址（1）……30
第18図　H8号住居址（2）……31
第19図　H8号住居址（3）……32
第20図　H9号住居址　……35
第21図　H10号住居址（1）……37
第22図　H10号住居址（2）……38
第23図　H10号住居址（3）……39
第24図　H11号住居址　……41
第25図　H12号住居址（1）　……42
第26図　H12号住居址（2）　……43
第27図　H12号住居址（3）　……44
第28図　H13号住居址（1）　……49
第29図　H13号住居址（2）　……50
第30図　H14号住居址（1）　……53
第31図　H14号住居址（2）　……54
第32図　H14号住居址（3）……55
第33図　H15号住居址　……58
第34図　H16号住居址　……59
第35図　H17号住居址　……61
第36図　H18号住居址　……62
第37図　H19号住居址　……63
第38図　H20号住居址　……65
第39図　H21号住居址　……67
第40図　H22号住居址（1）……69
第41図　H22号住居址（2）……70
第42図　H22号住居址（3）……71
第43図　H22号住居址（4）……72
第44図　H23号住居址（1）……76
第45図　H23号住居址（2）……77
第46図　H24号住居址　……79
第47図　H25号住居址（1）……81
第48図　H26号住居址（2）……82
第49図　H27号住居址　……83
第50図　H28号住居址（1）……85
第51図　H28号住居址（2）……86
第52図　H29号住居址　……88
第53図　H30号住居址（1）……90
第54図　H30号住居址（2）……91
第55図　H30号住居址（3）……92
第56図　H31号住居址　……95
第57図　F1・F3号掘立柱建物址　……96
第58図　F2・F5号掘立柱建物址　……98
第59図　F4号掘立柱建物址　……99
第60図　F6・7号掘立柱建物址……100
第61図　F8・F9号掘立柱建物址……101
第62図　F10・F11号掘立柱建物址　……103
第63図　F12・F14・F20号掘立柱建物址　……105
第64図　F13号掘立柱建物址……106
第65図　F15・F17・F18号掘立柱建物址　……107
第66図　F16号掘立柱建物址……108

第67図　F19・F22号掘立柱建物址……109
第68図　F21・F23・F24号掘立柱建物址……110
第69図　単独ピット……111
第70図　土坑……114
第71図　SM1・SM2号周溝……115
第72図　SM3・SM8号周溝……117
第73図　SM4～SM7・SM9・SM10号周溝……119
第74図　SM11号周溝……121
第75図　M1・M2・M3号溝状遺構……123
第76図　M4・M5号溝状遺構……124
第77図　グリット・表採……125
第78図　IEOIH1号住居址（1）……128
第79図　IEOIH1号住居址（2）……129
第80図　IEOIH1号住居址（3）……130
第81図　IEOIH2号住居址（1）……133
第82図　IEOIH2号住居址（2）……134
第83図　IEOIH2号住居址（3）……135
第84図　IEOIH4号住居址……137
第85図　IEOI土坑……139
第86図　IEOIEM1・EM3・EM4～7号周溝址・M2・M3号溝址……140
第87図　IEOV全体図……141
第88図　IEOVH1号住居址（1）……143
第89図　IEOVH1号住居址（2）……144
第90図　IEOVH1号住居址（3）……145
第91図　IEOVH2号住居址……149
第92図　IEOV（D1・D2）土坑……150
第93図　周溝墓分類図……151
第94図　周溝墓変遷表図……151
第95図　円正坊遺跡Ⅳ周溝墓分布図……152
第96図　円正坊遺跡Ⅳ土器分類図（1）……153
第97図　土師器杯分類図（古墳時代）……154
第98図　円正坊遺跡Ⅳ土器分類図（2）……156
第99図　円正坊遺跡Ⅳ土器分類図（3）……158
第100図　円正坊遺跡Ⅳ土器分類図（4）……160
第101図　円正坊遺跡Ⅳ土器分類図（5）……160
第102図　円正坊遺跡Ⅳ古墳時代竪穴住居址変遷図……163
第103図　円正坊遺跡Ⅳ土器土器編年図（6）……165

図版目次

巻頭図版1　円正坊遺跡Ⅳ航空写真
巻頭図版2　円正坊遺跡Ⅳ近景
巻頭図版3　円正坊遺跡Ⅳ近景・全景
巻頭図版4　円正坊遺跡Ⅳ全景
巻頭図版5　円正坊遺跡ⅣⅠ・H地点全景
巻頭図版6　円正坊遺跡ⅣK・D・J地点全景
図版1　H1・H2号住居址
図版2　H3・H4・H5住居址
図版3　H6・H7号住居址
図版4　H8号住居址
図版5　H8・H9号住居址
図版6　H10号住居址
図版7　H11・H12号住居址
図版8　H13・H14号住居址
図版9　H14・H15・H16号住居址
図版10　H17・H18住居址
図版11　H19・H20号住居址
図版12　H21・H22号住居址
図版13　H21・H22・H23号住居址
図版14　H24・H25号住居址
図版15　H26・H27・H29号住居址
図版16　H28号住居址
図版17　H30号住居址
図版18　H30号住居址
図版19　H31号住居址
図版20　F1～F5号掘立柱建物址
図版21　F5～F12号掘立柱建物址
図版22　F13～F18号掘立柱建物址

図版23　F19～F23号掘立柱建物址
図版24　F22・F24号掘立柱建物址・D1～D4
図版25　SM1～SM5号周溝址
図版26　SM6～SM10号周溝址
図版27　SM11号周溝・M1～3号溝址
図版28　M4・M5号溝址
図版29　IEOIH1・H2号住居址
図版30　IEOIH4・土坑・EM6号周溝
図版31　IEOIEM1・3～5・7号周溝
図版32　IEOVH1号住居址
図版33　IEOVH2号住居址・土坑
図版34　H1・H2号住居址
図版35　H3・H4号住居址
図版36　H5・H6・H7号住居址
図版37　H7・H8号住居址
図版38　H8号住居址
図版39　H8・H9・H10号住居址
図版40　H10・H11号住居址
図版41　H12号住居址
図版42　H12号住居址
図版43　H12・H13号住居址
図版44　H13・H14号住居址
図版45　H14号住居址
図版46　H15～H20住居址
図版47　H21・H22号住居址
図版48　H22号住居址
図版49　H22・H23号住居址
図版50　H23・H24・H25号住居址
図版51　H26・H27・H28号住居址
図版52　H29・H30号住居址
図版53　H30号住居址
図版54　H30・H31号住居址
図版55　掘立柱建物址・土坑・SM1～3号周溝址
図版56　SM11号周溝・溝址・グリット・炭採
図版57　H2～H30号住居址（1：1）
図版58　H23～H30号住居址・掘立柱建物址・土坑（1：1）
図版59　周溝・グリット・IEOVH1・H2号住居址
図版60　IEOIH1号住居址
図版61　IEOIH1・H2号住居址
図版62　IEOIH2・H4号住居址・周溝址
図版63　IEOVH4・H1号住居址
図版64　IEOVH1号住居址
図版65　IEOVH2号住居址・開通後の円正坊遺跡Ⅳ

第１章　発掘調査の概要

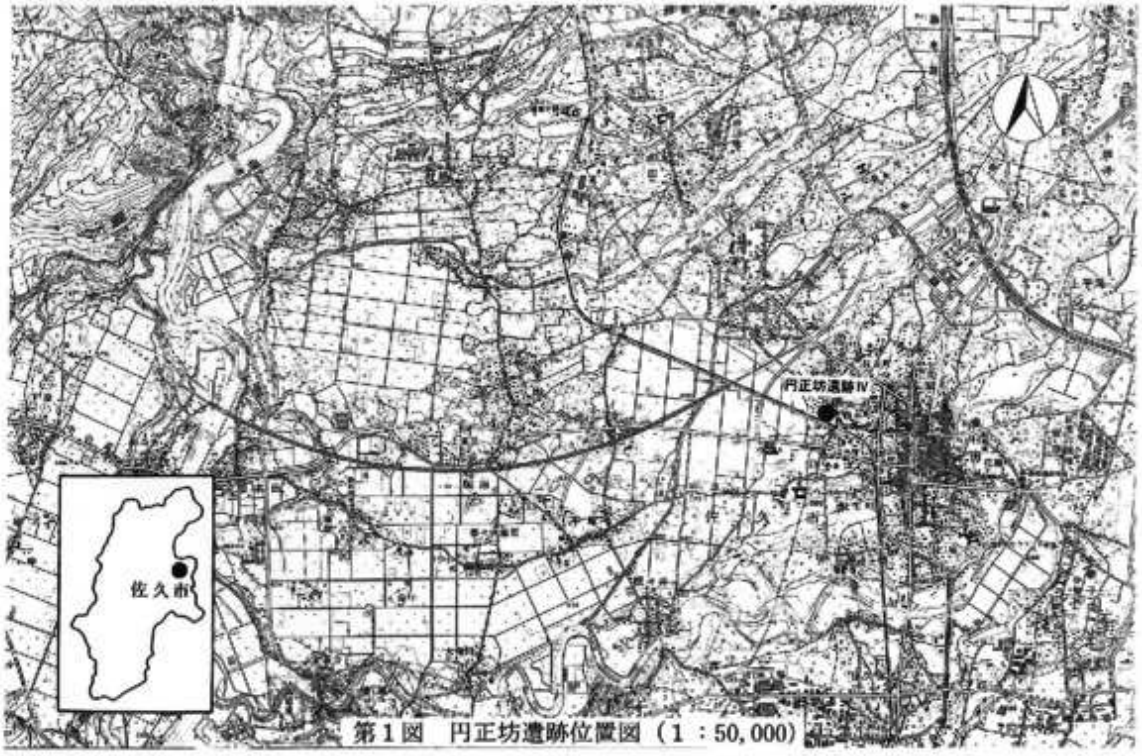
第１節　調査の経緯

円正坊遺跡は佐久市岩村田地籍にあり、小海線岩村田駅の西にある。この遺跡は考古学的に由緒のある遺跡で、昭和９年刊行の八幡一郎著『北佐久郡の考古学的調査』（Ｐ131－先史時代後期の遺跡－岩村田駅付近の竪穴）において、すでに登場している。

「岩村田町付近一帯の地が遺跡に富むことはすでに知った所である。佐久鉄道の敷設、中学校及女学校の地均等の大工事に際してはもとより、土地開墾にあたって暴露される竪穴の数は極めて多く、その都度多数の土器が発見された。佐久鉄道株式会社岩村田駅付近にも再三斯かる機会があった。 神津猛氏の注意に基づき、本教育会郷土研究部委員は、昭和５年６月該所の調査を行い、その一部を調査した。」とこのように述べられ、昭和５年に発掘調査が行われた地である。

また、昭和59年には日本道路公団の建物の建築に伴い円正坊Ｉ地点が発掘調査され、竪穴住居址、円形周溝が検出されている。今回、都市計画課により都市計画道路佐久駅蓼科口線道路改築工事が着工されることとなり、遺跡の破壊が余儀なく、発掘調査を行い記録保存する運びになり、佐久市教育委員会文化財課が担当した。

遺　跡　名　枇杷板群円正坊（えんしょうぼう）遺跡Ⅳ（略号　ＩＥＯⅣ）
所　在　地　佐久市岩村田字円正坊1289－１他
調査委託者　佐久市都市計画課
開発事業　都市計画道路佐久駅蓼科口線道路改築工事
発掘調査期間　平成11年５月６日～平成13年10月26日
整理調査期間　平成11年８月23日～平成14年３月31日
調査面積　4,200㎡



第１図　円正坊遺跡位置図（１：50,000）

第2節　調査体制

調査受託者

教　育　長　依田　英夫（平成11・12・13年度4～6月）高柳　勉（平成13年度7月～）

事務局

教育次長　小林　宏三（平成11・12・13年度4・5月）黒沢　俊彦（5月～）

文化財課長　草間　芳行

文化財係長　荻原　一馬（平成11・12・13年度4・5月）森角　吉晴（平成13年度5月～）

文化財係　林　幸彦　須藤　隆司　小林　真寿　羽毛田卓也　富沢　一明　上原　学
山本　秀典　出澤　力

調査主任　佐々木　宗昭　森泉　かよ子

調査副主任　堺　益子

調査担当者　森泉　かよ子

調　査　員

小田川　栄　小金澤たけみ　小林百合子　小山　功　佐藤　愛子　中島フクジ　中島　良三　中島　里佳
中條　悦子　花里四之助　花里三佐子　林　美智子　細谷　秀子　水間　雅義　柳澤千賀子　山浦　豊子
土屋　千浩　小林よしみ

第3節　調査日誌

平成11年度（1999）

5月6日～5月10日

円正坊の発掘調査に入る。

円正坊に重機を入れ、下段にトレンチを設定し遺構の有無を確認。

すでに削平され遺構なく排土置き場とする。

5月11日～6月17日

調査区に置かれていた排土の搬出、駐車場に敷いてあった砕石の撤出を始める。

重機・ダンプにより耕作土の除去、遺構面検出面まで下げ始める。

5月13日

調査員現場に入る。建物による撹乱が多く、駐車場跡は転圧され非常に締まり遺構の検出作業が困難。基準杭設定始める。

5月14日

撹乱の除去・遺構掘り下げに入る。

掘立柱建物址の柱穴の平面プランは楕円形、断面は覆土の上に地山のローム層がのっているという初めてのケースに戸惑う。

遺構上部または床面付近でスライドし西方向にズレをきたしていることを確認。地盤状況ごとに違うため個々の地盤のズレ把握しきれない。

5月18日

風が強く、乾燥のため排土除去の際にほこりが舞い、苦情あり。

7月12日～15日

雨のため土器洗い。

（平成11年5月　北より）

（平成11年5月　南東より）

（平成11年7月　H7号住居址　南より）

8月2日

調査を進めながら清掃に入る。

8月4日

住居址・周溝の土ふるいを始める。

8月9日

発掘調査・清掃・土ふるいを終了し、機材の撤収を行う。

8月10日

現場の道具整備後、土器洗いを始める。

8月11・12日

ラジコンヘリにて、遺跡の航空撮影・航空測量を行う。音がうるさいとの苦情あり。

8月17日～8月21日

重機・ダンプで、遺跡の埋め戻し・整地を行う。

8月23日～8月25日

土器注記作業。

1月7日～1月13日

図面修正を行うが、ズレによる遺構の表記に苦慮する。

平成12年度

4月26日～5月31日

室内整理作業。土器注記・図面修正。

6月1日～6月23日

一部土器接合し、石膏を入れ、土器実測。

7月5日

調査区西端に道路工事用通路造成のため、一部トレンチを入れ、遺構確認する。

遺構遺物なし。

10月26日～1月12日

土器接合後、実測用に土器に石膏を入れ、土器実測。遺構図のチェックを行う。

12月19日～25日

現場調査に入る。東側調査区H地点に重機・ダンプを入れ、調査区に積まれた排土、廃棄物の除去を行う。耕作土を除去し遺構検出をする。

凍結防止のため、遺構検出地点には再度土を乗せる。

1月15日

ビニールハウスを建てて現場の調査に入る。

朝方雪が降り、－16°と冷え込む。

耕作土を除去しながら検出作業を行う。ハウス内でも地表面は凍結。朝方は作業困難。

基準杭設定。

1月18日～25日

調査区西側のI地点に重機を入れ、耕作土の除去・搬出後、検出し、凍結防止のため一旦埋め戻す。東端のG地点に重機を移動し、耕作土の除去・搬出後検出し、凍結防止のため埋め戻す。

（平成11年8月　平成11年調査地点　南より）

（平成12年7月5日　西端にトレンチ設定　東より）

（平成13年1月　H地点　西より）

（平成13年1月　I地点　東より）

1月22日

調査区H地点の雪を除去後清掃し全体撮影。

1月23日～2月16日

機材撤収・図面の整理を行う。

土器洗い・土器注記・土器実測・図面修正を行う。

2月1日・2日

G地点耕土除去・機材搬入。

2月5日

一部調査員でG地点の現場調査に入る。

2月15日

重機によりI地点の耕土除去・搬出を行う。

朝は凍結、日中はぬかるむという状況。

2月19日

ハウスをかけてI地区に調査員入る。

基準杭設定。

2月26日

G地点のビニールハウス撤去。I地区は土曜日の雨のため浸水。陥没する。

2月28日

G地点調査終了。清掃して、全体撮影をする。

3月1日

西端のK地点の耕作土の除去。

3月5日

I地点のハウスを撤去し、ハウス外の遺構の検出作業。また、昨日の雪、水の除去。全体清掃、撮影を行う。

3月6日

I地点ズレの残りを調査し、終了。

K地点の検出を行う。

3月19日

K地点の調査を終了。機材撤収を行う。

3月26日

継続していた室内整理作業の平成12年度は終了する

(平成13年度)

4月1日

昨年度に引き続き、室内整理作業を始める。

5月24日

現場作業に入る。残っていたD・J地点の表土の除去・搬出を重機・トラックで始める。

5月28日～6月11日

調査員が入り現場の発掘調査に入る。

住宅の跡地のため攪乱が多く、遺構の検出が困難である。また遺構のズレが大きく、わからない。

11日に清掃し全体の写真撮影。

9月1日

D地点の北、一部残った部分と道路の耕土除

(平成13年1月　H地点全景　北より)

(平成13年3月　K地点　北より)

(平成13年6月　D地点　西より)

(平成13年6月　D・J地点全景　東より)

去・搬出を重機で行い始める。

9月6日

現場に調査員入る。遺構検出を行う。

9月10日

台風による記録的大雨のため現場は水没。浸水部に土嚢を積み、崩壊浸水を防ぐ。

9月12日

現場を再開し、埋もれたや溜まった水の除去から始める。

9月18日

埋め戻しを終了し、現場での作業は本日で終了

10月23日～10月26日

最終の調査地に重機を入れ、耕土除去後発掘調査に入る。植木の撹乱と、遺構のズレのため解りづらい調査であった。

3月31日

引き続き室内整理作業を行い報告書を刊行する

（平成13年8月　室内作業）

（平成13年10月　D地点　最後の調査地点　東より）

第4節　調査結果の概要

弥生時代後期または末～古墳時代初頭の円形・方形の周溝、古墳時代中期・後期の竪穴住居址と掘立柱建物址、平安時代の竪穴住居址と掘立柱建物址、中世から近世の道路址等が検出されている。中心は古墳時代の集落址である。近年の構築物による破壊が各所にあり、遺構が撹乱され、調査の執行状況に影響を与えた。本遺跡では遺構が中位で西北方向にずれる地殻の水平移動があり、ズレは地盤や遺構の深さ・規模に左右され、0～100cm 移動している。従って、ズレのある遺構は住居址が水平方向に分断されているため一棟の住居址・掘立柱建物址を2回調査した。また移動した厚いロームに覆われたため、掘立柱建物址の柱穴などは検出しきれず、写真や図面、そして予算の都合上移動した部分の調査にとどまる遺構もある。

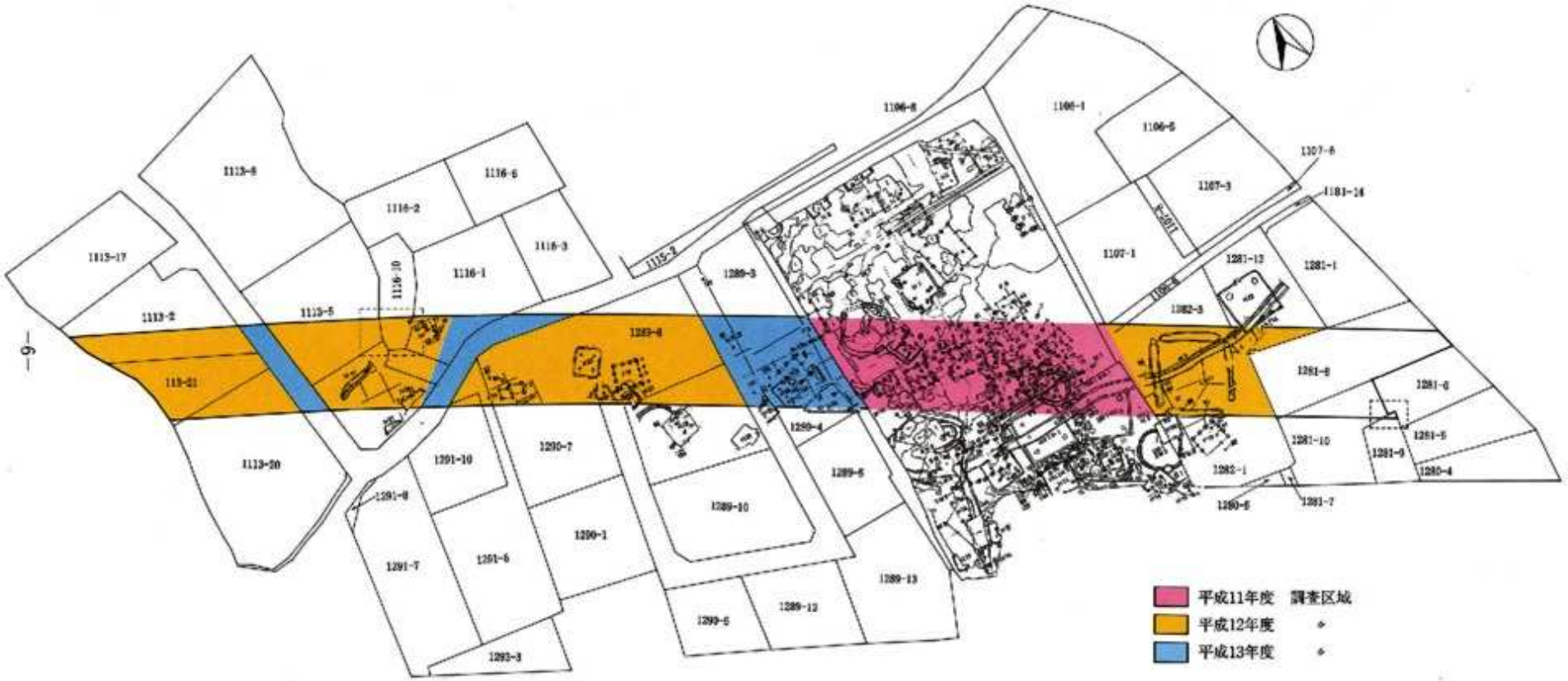
検出遺構

古墳時代中期・後期	竪穴住居址		27棟
平安時代	〃		4棟
古墳時代	掘立柱建物址		21棟
単独ピット			104個
弥生時代後期		方形周溝	3基
〃	～古墳時代初頭	円形周溝	7基
古墳時代後期		古墳周溝	1基

中世～近世	溝（道路址含む）	3本
弥生・古墳	〃	2本
古墳時代・不明	土坑（井戸址含む）	3基

主な出土遺物

弥生式土器	壺・甕・杯・高杯
土師器	杯・高杯・鉢・丸胴甕・長胴甕・甑
須恵器	杯・壺・甕
陶磁器片	青磁碗・白磁碗
鉄製品	鉄鏃・刀子・鎌・鉄滓
石製品	石製模造品（剣・鏡）・臼玉・管玉・勾玉・スリ石・編物石・石鏃
炭化物	柱・屋根材・カヤ状炭化物・木の実
古　銭	寛永通寶・半銭
骨	



第２図　円正坊遺跡 Ⅳ遺構配置図（１：1,000）

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

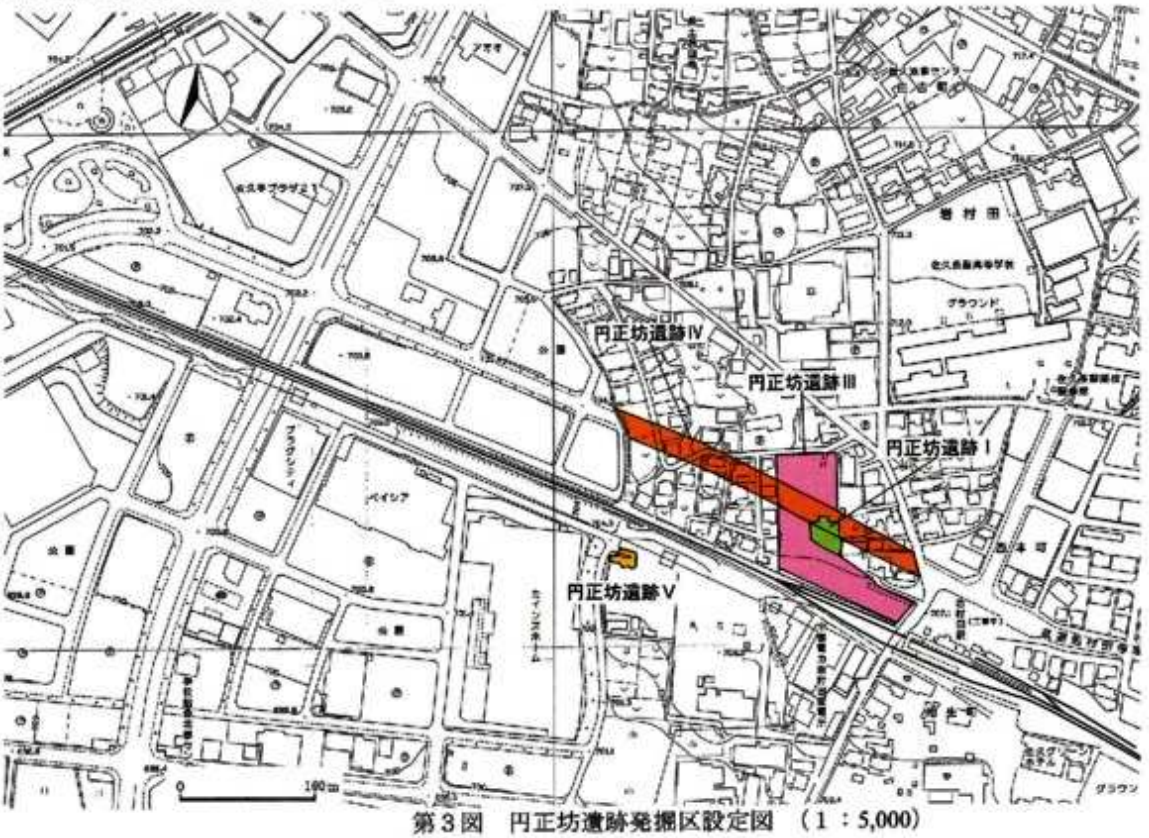
円正坊遺跡Ⅳは小海線岩村田駅の東、標高708～709mを測る地点にある。佐久市の北中央に当たり、岩村田の台地西縁に位置する。この地域は1万4千年～1万1千年前頃の浅間火山噴出物である浅間第1軽石流（P1）が地盤に堆積している所である。

浅間山南麓の末端部に位置するこの地域は、火山山麓特有な田切り地形が発達している。この軽石流堆積物は固結凝集が不十分で水の浸食に極めて弱く、小さな川でも浸食されて田切り地形を形成しやすいのである。これらの田切りは、御代田方面（佐久市の北東隣接町）から南西方向に放射状に伸びている。円正坊遺跡も浅間火山がもたらした浅間1軽石流（P1）が厚く堆積している地点である。南西方向に伸びる田切りは台地状を成し、台地上には集落跡が営まれている。佐久市の北から周防畑遺跡群、芝宮遺跡群、長土呂遺跡群、枇杷坂遺跡群、岩村田遺跡群となっている。

円正坊遺跡Ⅳはこの浸食されできた台地状の遺跡群の一つである枇杷坂遺跡群南西端部に当たっている。(円正坊遺跡群も枇杷坂群遺跡群の南に伸びる延長上の台地にあるため枇杷坂遺跡群で一括する）西には濁り川が南流し、東は久保田用水を挟み岩村田遺跡群がある。南西方向に伸びる台地の西端は低地に望み、田切りは消滅して行く。低地では、弥生から現在の水田まで各時代の水田層（濁り遺跡）が確認されている。

今回報告しているように本遺跡では地盤のズレがみられる。現在この地盤のズレが確認されているのは、本遺跡の周辺に限られ1～5円正坊遺跡Ⅰ～Ⅴ、7清水田遺跡Ⅲ、8直路遺跡Ⅰ～Ⅲで確認されている。この地点は台地の西端で低地に望むことから、地滑りによる地盤のズレが考えられ、台地縁辺での現象とみられる。

岩村田の西隣長土呂地区では長野新幹線の開通、伴う区画整理、国道141号バイパス開通など開発が多い地域である。第4図周辺遺跡分布図で示したように所々ではあるが、岩村田周辺の古代の様子が類推できる状況になっている。



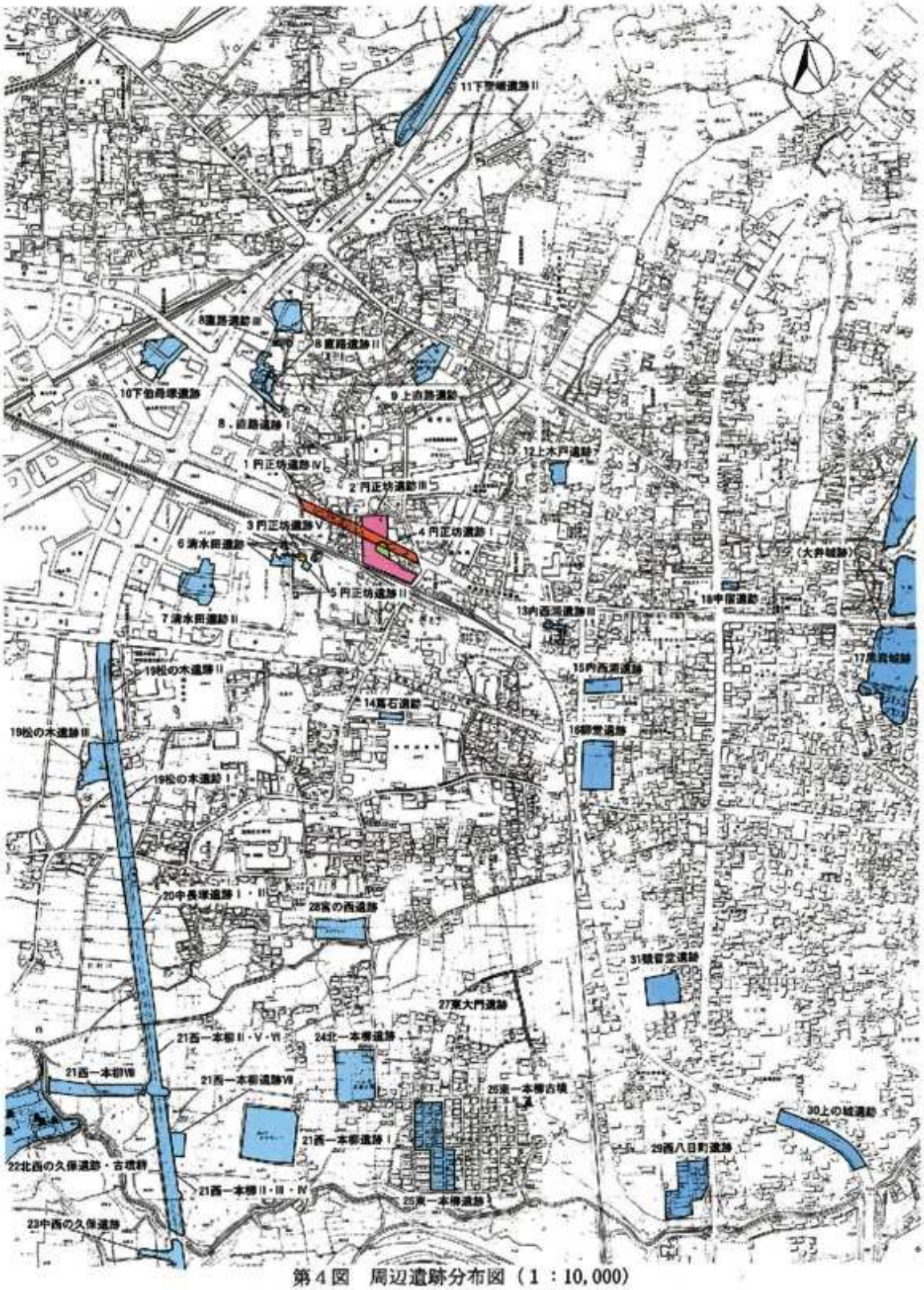
第3図　円正坊遺跡発掘区設定図　（1：5,000）

円正坊遺跡では本遺跡を含め５回にわたって調査がなされ、円正坊遺跡Ⅰ・Ⅲ・Ⅳでは古墳時代中期から後期、平安時代の住居址、弥生後期～古墳時代の周溝が検出され、小海線の南、本遺跡から南西に200～300m地点の円正坊遺跡Ⅱ・Ⅴ地点では弥生時代中期・後期竪穴住居址が構成に加わる。西に隣接する清水田遺跡では、弥生時代中期１棟・後期10棟、古墳時代中期３棟の竪穴住居址、土壙墓、溝が検出された。さらに南西方向の清水田遺跡Ⅱには弥生時代後期の竪穴住居址９棟、溝址がある。本遺跡の北西には８直路遺跡Ⅰ～Ⅲが調査され、弥生時代後期竪穴住居址がある。このうち６清水田遺跡を除いて、地整の水平方向のズレが遺構で確認された。14篤石遺跡では弥生後期の土器棺墓が１基が検出されている。

円正坊遺跡Ⅳの中心である古墳時代中期から後期の遺跡について周辺での遺跡分布をみてみることにする。北では11下聖端遺跡では弥生時代後期４棟、古墳時代中期13棟、古墳時代後期25棟、奈良～平安時代16棟が検出されている。古墳時代中期は本遺跡と同様の土器構成がみられる。17黒岩城跡では15棟の竪穴住居址が検出され、６棟が古墳時代中期、９棟が古墳時代後期である。この構成は円正坊遺跡Ⅳと類似し、焼失家屋が２棟ある。13の内西浦遺跡Ⅲにおいても古墳時代中期の竪穴住居址と、大量の土器が出土している。そしてさらに南下して湯川沿いには弥生中期～古墳時代、平安時代にわたる一本柳遺跡群の集落が展開している。中でも北西の久保遺跡では弥生中期～後期の竪穴住居

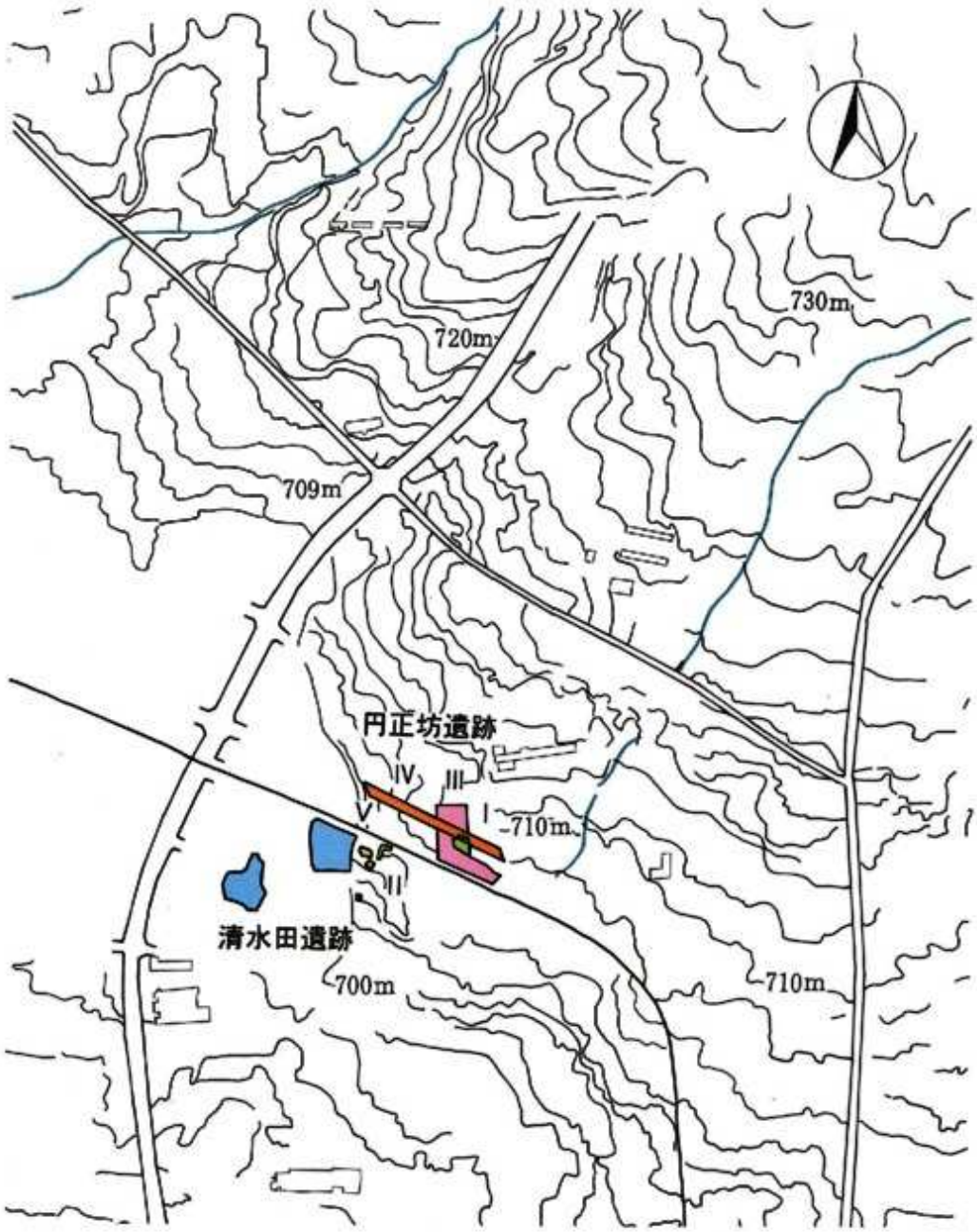
第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺　跡　名	所　在　地	立地	時　代	発掘調査年度・備考
1	枇杷坂遺跡群円正坊遺跡Ⅳ	岩村田字円正坊外	台地	古～平	平成11～13年・本調査
2	〃　円正坊遺跡Ⅲ	岩村田字円正坊外	台地	古～平	平成11年
3	〃　円正坊遺跡Ⅴ	岩村田字円正坊外	台地	弥・古	平成11年
4	〃　円正坊遺跡Ⅰ	岩村田字円正坊外	台地	弥～古	昭和59年
5	〃　円正坊遺跡Ⅱ	岩村田字円正坊外	台地	弥～古	平成８年
6	〃　清水田遺跡	岩村田字清水田	台地	弥・古	昭和53年
7	〃　清水田遺跡Ⅱ	岩村田字清水田	台地	弥・古	平成10年
8	〃　直路遺跡Ⅰ～Ⅲ	長土呂字直路	台地	弥・中	平成９～11年
9	〃　上直路遺跡	岩村田字上直路	台地	弥	昭和60年
10	下伯母塚遺跡	長土呂字下伯母塚	台地	弥～古	平成９年
11	長土呂遺跡群下聖端遺跡Ⅱ	長土呂字下聖端	台地	弥～平	昭和63年
12	岩村田遺跡群上木戸遺跡	岩村田字上木戸	台地	縄・弥・平	平成13年
13	〃　内西浦遺跡Ⅲ	岩村田字内西浦	台地	弥・古	平成12年
14	枇杷坂群遺跡群篤石遺跡	岩村田字篤石	台地	弥	昭和63年
15	岩村田遺跡群内西浦遺跡	岩村田字内西浦	台地	中	平成元年
16	岩村田遺跡群柳堂遺跡	岩村田字柳堂	台地	弥・平・中	平成10・12年
17	黒岩城跡（大井城跡）	岩村田字古城	台地	古・中	昭和59年
18	岩村田遺跡群中宿遺跡	岩村田字中宿	台地	古・近	平成９年
19	松の木遺跡Ⅰ～Ⅲ	岩村田字松の木	台地	弥・古	平成８・９年
20	中長塚遺跡Ⅰ・Ⅱ	岩村田中長塚	台地	中・近	平成８・10年
21	一本柳遺跡群西一本柳遺跡１～Ⅲ	岩村田字西一本柳外	台地	弥～中	平成３～平成13年
22	北西の久保遺跡・古墳群	岩村田字北西の久保	舌状台地	弥～中	昭和44・45・57・60年
23	中西の久保遺跡	岩村田字中西の久保	河岸段丘	古～平	平成７年
24	一本柳遺跡群北一本柳遺跡	岩村田字北一本柳	台地	弥・平	昭和47年
25	〃　東一本柳遺跡	岩村田字東一本柳	台地	弥	昭和43年
26	〃　東一本柳古墳	〃	台地	古	昭和46年
27	〃　東大門遺跡	岩村田字東大門	台地	弥・平	平成元年
28	宮の西遺跡	岩村田字宮の西	台地	弥～中	昭和58年
29	上の城遺跡群西八日町遺跡	岩村田字西八日町	台地	弥・奈～平	昭和58年
30	〃　上の城遺跡	岩村田字上の城	台地	古～平	昭和48年
31	〃　観音堂遺跡	岩村田字観音堂	台地	平・中	平成９年



第４図　周辺遺跡分布図（１：10,000）

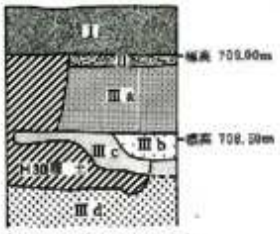
址128棟、古墳時代中期の竪穴住居址19棟、平安時代の竪穴住居址７棟と礫床棺墓と円形の周溝が17基検出された。古墳時代中期の竪穴住居址と円形の周溝はほぼ同期であり、東に居住域、西に墓域という空間が設定されていたことが判明している。S17周溝からは人物や鳥などの形象埴輪が出土し、長野県内では稀少例で貴重なものとなっている。この東に続く西一本柳遺跡では古墳時代中期の住居址が９棟検出される。この古墳時代中期の遺構はこの岩村田から南西の地にもみられることがわかるが、この時代が佐久地域で、どの程度の分布を示すかというと、今のところ湯川・千曲川流域の近接地域に限られるようである。



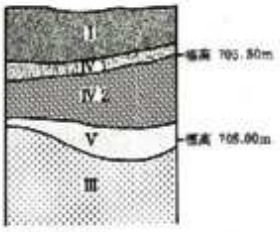
第５図　円正坊遺跡周辺地形図（１：10,000）

第Ⅲ章　基本層序

円正坊遺跡は浅間第１軽石流（Ｐ１）が地盤なし、遺構は浅間第１軽石流（Ｐ１）中に構築している。調査区西端では低地にさしかかり、水田層がみられた。



（H30号住居址地点）



（西端地点）

第６図　基本層序模式図

第Ⅰ層　耕作土

第Ⅱ層　黒褐色土層（10YR2/3）　漸移層
～５㎜大パミス・ローム粒子含む。

第Ⅲａ層　にぶい褐色土層（7.5YR4/3）
浅間第１軽石流（ｐ１）。

第Ⅲｂ層　にぶい橙色土層（7.5YR6/4）
浅間第１軽石流（ｐ１）

第Ⅲｃ層　にぶい黄褐色土層（10YR5/8）
浅間暗褐色ロームを含む。

第Ⅲｄ層　にぶい褐色土層（7.5YR5/4）
浅間第１軽石流（ｐ１）

第Ⅳ１層　黒褐色土層（7.5YR3/2）
水田層。鉄分層

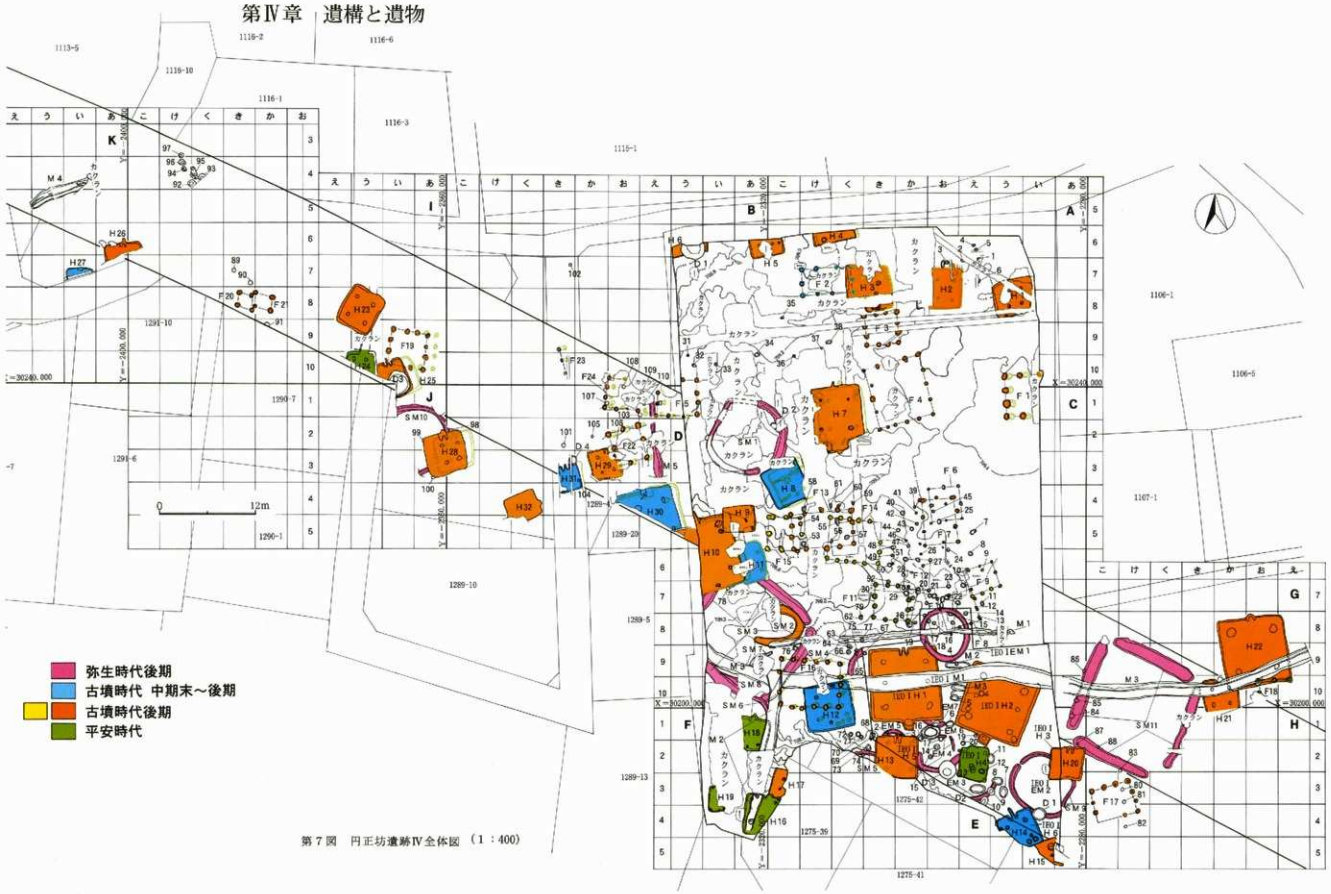
第Ⅳ２層　黒褐色土層（7.5YR3/2）
水田層。

第Ⅴ層　暗褐色土層（7.5YR3/3）
砂質土。

H30号住居址東壁（南より）

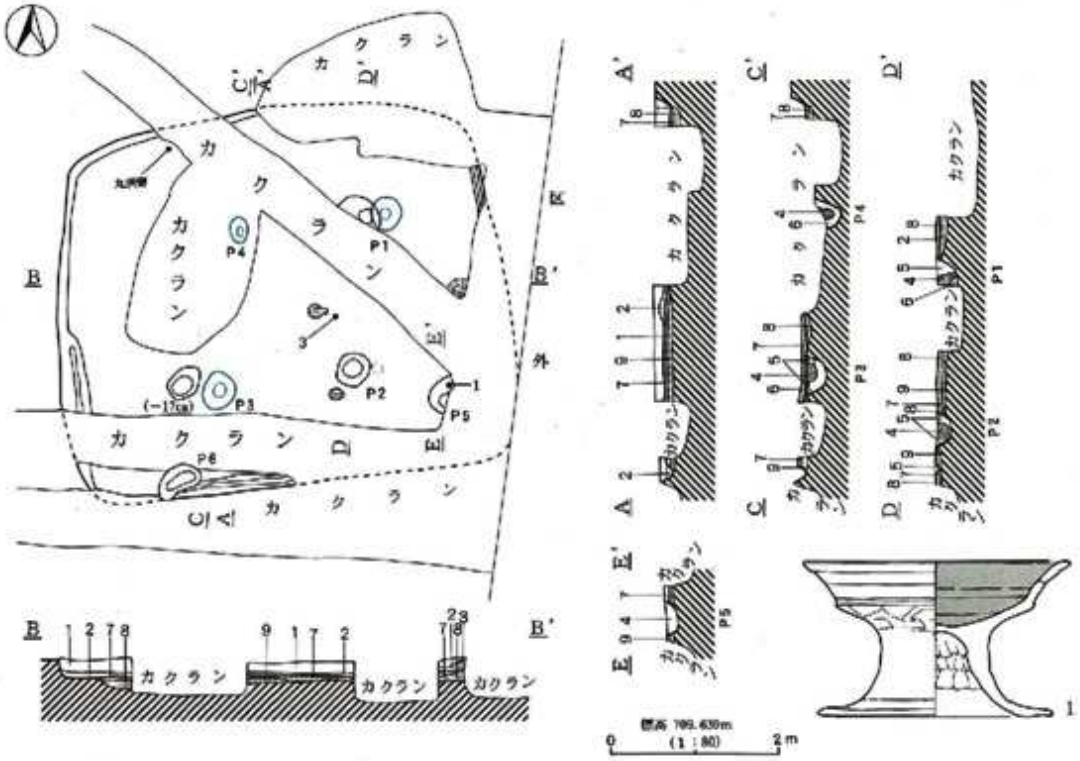
西端水田地点（南より）

第６図で示したように地盤のズレが観察でき、H30号住居址の東壁を例に示した。浅間第１軽石流が２～３段階にわたって、ズレている様子が窺える。ズレの下面には滞水した際の鉄分堆積層がみられる。このズレは、その地盤や、ずれる先、西方向の状況（住居址の覆土で地盤がゆるいまたは床面付近がズレの位置に当たる等）により異なるようである。このズレが何時起きたかということであるが、平安時代の住居址であるH16・H18号住居址、中世以降であろうＭ１の道路址にはみられず弥生時代後期～末の方形・円形の周溝はずれていることなど参考にすると、平安時代より以前と言うことができよう。ただし、東端のH21・22号住居址、ＳＭ11号周溝址はズレの層が遺構構築面より下層であるためか、遺構のズレはみられない。



第７図　円正坊遺跡Ⅳ全体図（１：400）

1. 竪穴住居址



H1 土層説明
1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 1cm大パミス・ローム粒子を含む。
2. 黒色土層 (10YR1.7/1) ロームブロック・パミスを多く含む。
3. にぶい赤褐色土層 (5YR4/4) 焼土を多量に含む。
4. 黒褐色土層 (10YR2/2) (炭化)
5. 暗褐色土層 (10YR3/4) ロームブロック・パミス (3cm大) を多く含む。(ピット底方)
6. にぶい黄色土層 (7.5YR6/4) ローム主体。
7. 褐色土層 (10YR4/4) ロームブロック主体に暗褐色土ブロック混在。(貼床)
8. 暗褐色土層 (10YR3/3) ロームブロック・暗黄色土混在。(壁方)
9. にぶい橙色土層 (7.5YR6/4) (移動したローム)

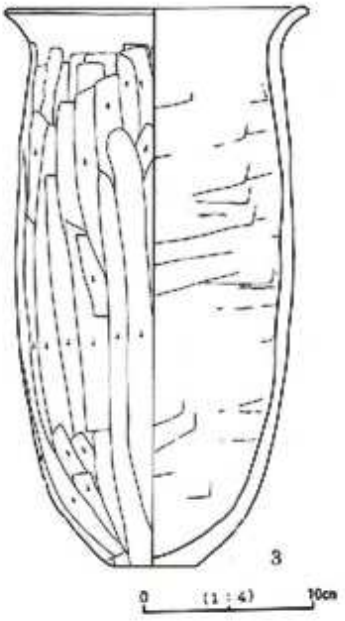
第８図　Ｈ１号住居址

１）Ｈ１号住居址（第８図、第２表、図版１・34）

調査区北東のＡい７グリットにあり、攪乱が随所にある上、駐車場に利用され転圧をうけ、非常に締まり、土器も押圧状態で検出された。また、地盤のズレのため、床面で西に40cm 程移動した位置で検出された。しかし東側が攪乱され、明確に東壁で住居址のズレを示すセクションは確認できなかった。地盤のズレの認識がなく東西にセクションを設定しなかったのでピットのズレは平面図に示されるのみである。推定で南北428cm、東西420cm を測る方形の住居址で、攪乱のため明確ではないが東壁側に粘土・焼土がみられることから東壁にカマドがあったものと推定される。主軸方位はＮ−80°−Ｗを測る。床面は転圧を受けたこともあり、締まっていた。柱穴は西に傾斜しており、なおかつ、中位でズレていた。

出土遺物には弥生式土器と土師器がある。弥生式土器は小片で図示できなかったが塗彩された高杯、頸部に櫛描Ｔ字文の壺、波状文の甕片がある。

土師器杯は小片で図示できなかったが、実測遺物には土師器高杯・小型甕・長胴甕がある。



1の高杯はＰ５からの出土で、やや短脚で太い頸部に有段口縁杯がのったもので杯下部には稜を有し、口縁部は沈線状の段をもって外傾外反する。薄手で端正にできているがゆがみが著い。北西に丸胴甕の胴部が出土しているが高杯と同様の胎土、色調を呈しミガキが施されている。３は長胴甕で、胴部外面はヘラケズリされ、胴下部丸みをもって底部に至る。

これらより、古墳時代後期の住居址と位置づけられよう。

第２表　Ｈ１号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	土師器 高杯	(15.8) (13.7) 9.1	内　杯部　みこみ部ナデ→口縁部横ナデ→黒色処理 脚部　裾部横ナデ→柱部ナデ 外　横ナデ・杯底部ヘラナデ (黒色処理か)	口縁部1/3、底部3/4残存 内　N4/0（灰） 外　7.5YR4/1（褐灰）	緻密。 粘土のような白黄色粒子、小石含む。 ゆがみ著しい。	
2	土師器 小型甕	(15.0) － 〈8.3〉	内　胴部ナデ→口縁部横ナデ 外　口縁部横ナデ・胴部縦位ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内　7.5YR7/3（にぶい橙） 7.5YR5/2（灰褐） 外　5YR7/3（にぶい橙）	1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子、黒色粒子含む。	
3	土師器 甕	(17.9) 4.9 33.2	内　口縁部横ナデ・胴～底部横位ヘラナデ 外　口縁部横ナデ→胴・底部ヘラケズリ	底部完形、口縁部1/3残存 内　7.5YR7/3（にぶい橙） 外　7.5YR7/3（にぶい橙） 7.5YR5/2（灰褐）	2mm以下の石英・長石粒子、赤色粒子を含む。 1mmの黒色粒子を少量含む。	

２）Ｈ２号住居址（第９・10図、第３表、図版１・34）

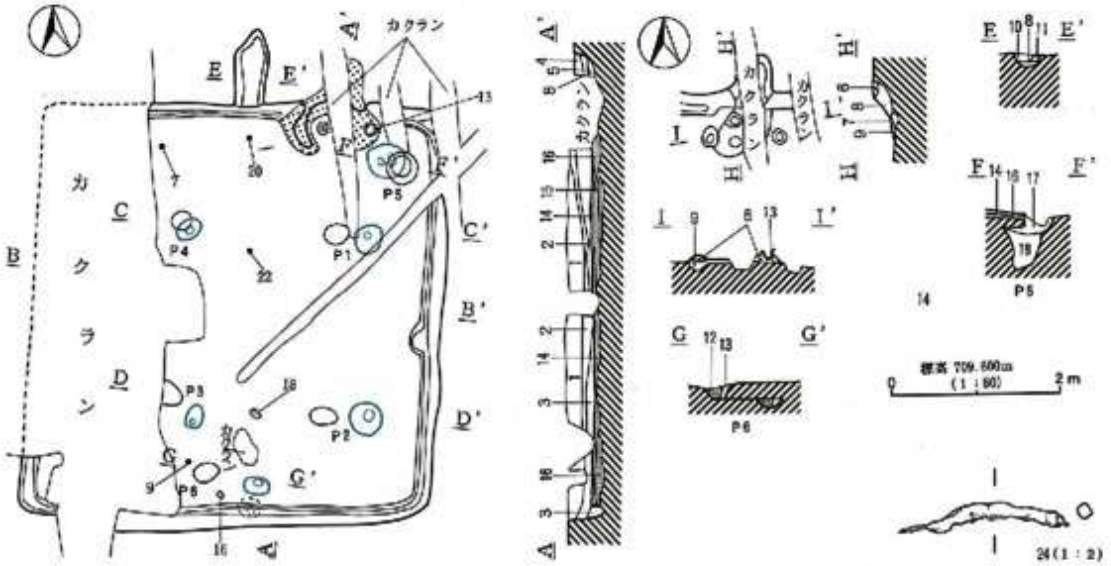
Ａえ７グリットにあり、西側は攪乱により大きく壊され、東も細く深い攪乱が４本入り込んでいる。また地盤のズレのためかカマドの煙道が中央に残り、カマド本体は中央ではなく東壁との中間の位置で検出されている。ズレが床面と柱穴中位で起きたものと推測されるが、明確なことはいえない。

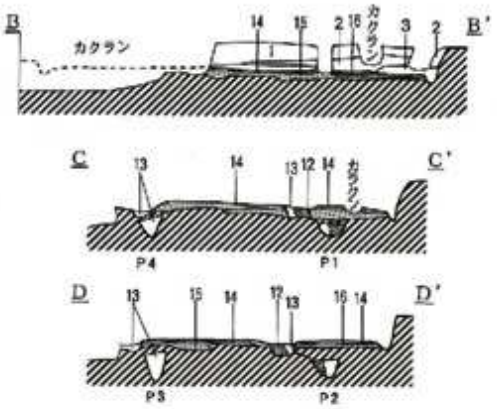
南北長460cm 東西長458cm を測り、方形を呈す。カマドは北壁にあり、主軸方位はＮ－４°－Ｅを指す。カマドは暗褐色を呈す粘質土で構築されている。カマド火床にはわずかに焼土がみられたが、攪乱のため全容は明らかでない。中央に残った煙道部は良く焼けていた。床面は締まるが、移動をしたために硬化した可能性もあり、床面とした14層は覆土が硬化したためであるかもしれない。床面で検出されたピットと堀方で検出されたピットを示したが、全般に西に移動している。しかしカマドと、その東下のＰ５をみると、東に移動した様子が窺える。従って、一様なズレではなかったようである。

出土遺物には縄文式土器・弥生式土器・須恵器・土師器、編物石、滑石製白玉、土製丸玉、滑石製石製模造品の未製品、鉄製品がある。縄文式土器は縄文中期後半の深鉢で曽利Ⅰ・Ⅱ式があてられる。弥生式土器はいずれも破片であるが拓本で示したほかに赤色塗彩の壺・高杯・杯の破片が多い。

須恵器は拓本に示した須恵器瓶の口縁部片があるのみである。土師器は杯・鉢・小型甕・丸胴甕・長胴甕・甑がある。杯は２の須恵器杯蓋の模倣品で、丸底外面に稜を有して口縁が直立する１・２、器高が深く口縁部は明確な稜を

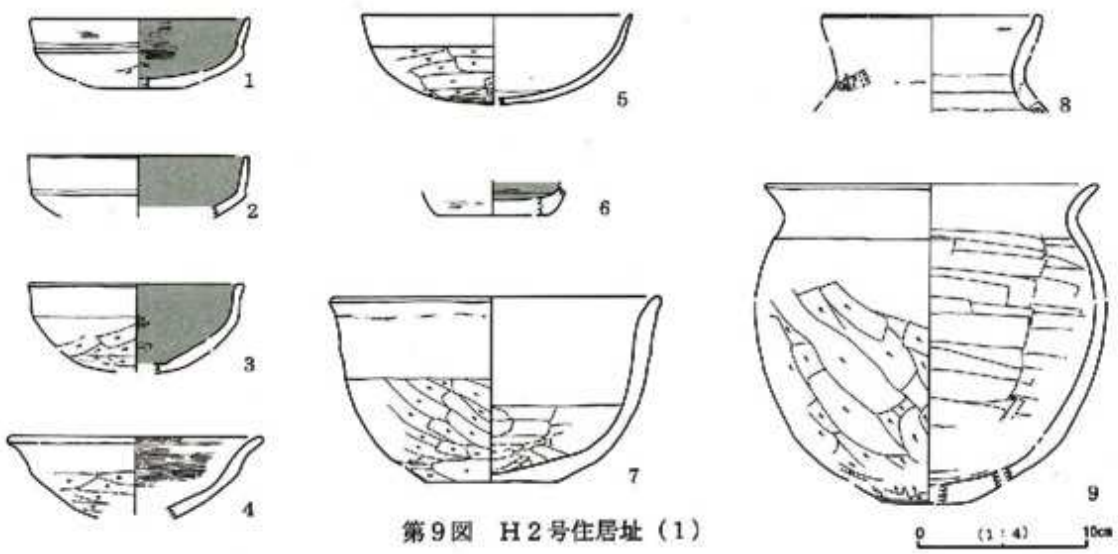
Ｈ２号住居址（南より）



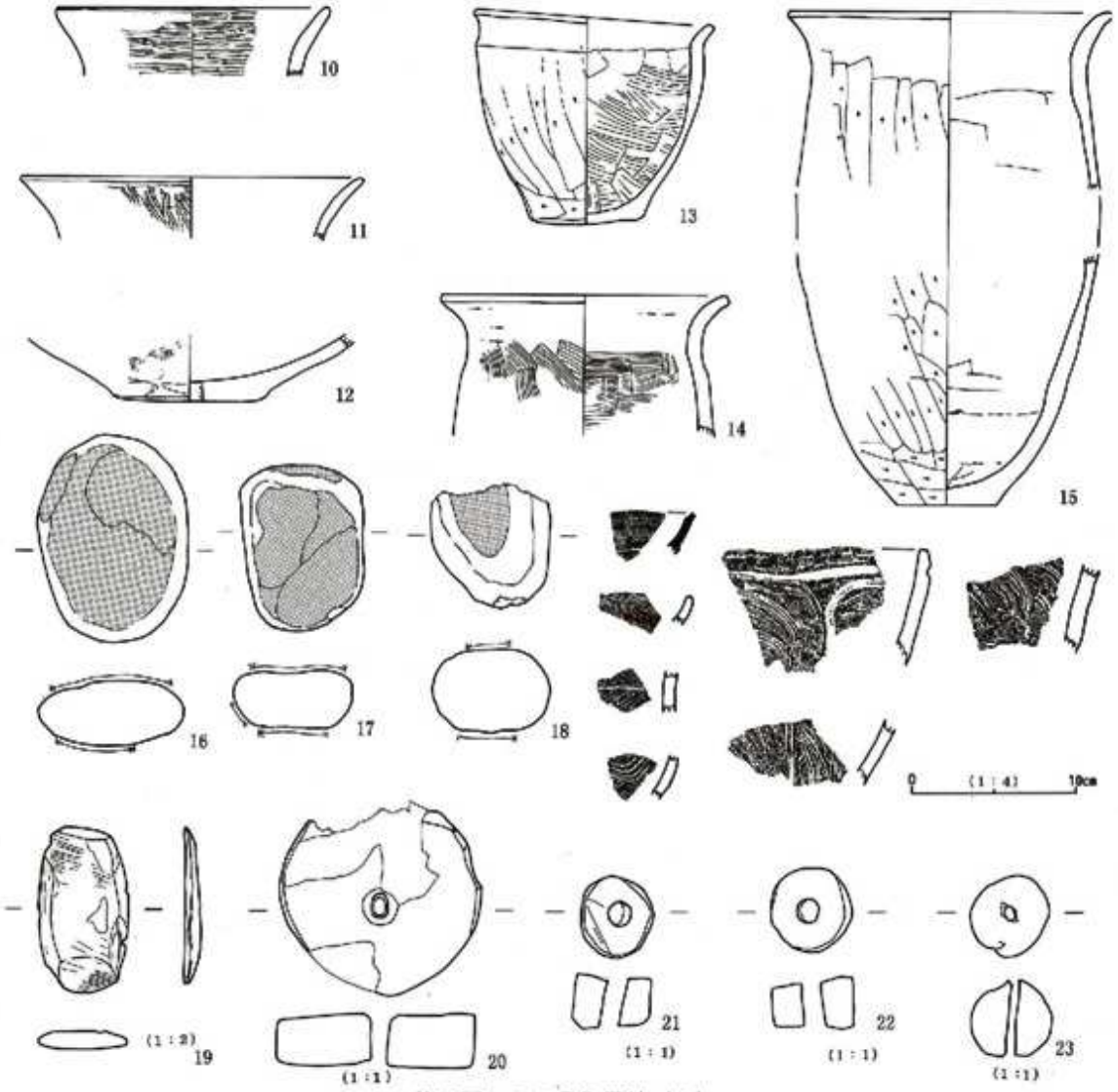


H2 土層説明

1.	黒褐色土層 (10YR2/2)	微パミス・1～3cm大パミス・ローム粒子を含む。
2.	黒褐色土層 (10YR2/2)	黒色土 (10YR1.7/1)・ローム粒子を多く含む。
3.	黒褐色土層 (10YR2/3)	～1cm大パミス・ローム粒子を含む。
4.	黒褐色土層 (7.5YR2/2)	焼けた粘土粒子多量に含む。（カマド）
5.	黒褐色土層 (7.5YR3/2)	4層より少ないが焼土粒子を含む。（カマド）
6.	暗褐色土層 (7.5YR3/4)	焼土。（カマド構築土）
7.	明赤褐色土層 (5YR5/6)	焼土。
8.	暗褐色土層 (7.5YR3/3)	焼土・焼土・ローム粒子・パミスを含む。（カマド東方）
9.	褐灰色土層 (7.5YR4/3)	パミス・ローム粒子を含む。いくらか焼ける。（カマド西方）
10.	暗褐色土層 (7.5YR3/3)	焼土粒子を多く含む。（カマド施設）
11.	褐色土層 (10YR4/4)	ローム層ブロック多く含む。（カマド燃焼）
12.	黒褐色土層 (10YR3/2)	焼土粒子を含む。（住居）
13.	褐色土層 (10YR4/4)	ローム層ブロックを含む。（ピット埋土）
14.	黒褐色土層 (10YR2/2)	パミス・ローム粒子を含む。締まる。（貼床）
15.	黒褐色土層 (10YR2/2)	ロームブロックを多く含む。締まる。
16.	黒褐色土層 (10YR2/3)	細ロームブロック・パミスを含む。（貼床）
17.	暗褐色土層 (7.5YR3/3)	焼土粒子・ローム粒子・パミス含む。粘性あり。（P5）
18.	黒褐色土層 (10YR2/2)	ロームブロック・パミスを多く含む。（P5）



第9図　H2号住居址（1）



第10図　H２号住居址（２）

持たないまま外反する３・４、口縁部がやや直立する程度で、明確な外稜を持たない５の杯等がある。７・９はは内面にミガキ調整されないが黒色処理をされたのではという色調をしている。(明確でないので処理の図示はさけた。)15の長胴甕は胎土の石英・長石粒が５㎜ほどの物が混入し、粗い。13の小型甕はカマドの東脇から出土した物であるが内面はハケ目状の調整がのこり、14の長胴甕の内外にもハケ目状の調整がみられる。

24の鉄製品はⅢ区で出土しており、攪乱が多く本住居址に伴うかわからない。

これらより、本住居址は古墳時代後期に位置づけられよう。

第３表　Ｈ２号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	土師器 杯	(13.0) (12.4) 〈4.1〉	内　ミガキ→黒色処理 外　口縁部ミガキ（？）・底部ヘラケズリ	口縁部一部のみ残存 内　2.5YR3/1（暗赤灰） 外　7.5YR7/3（にぶい橙）	1mmの赤色粒子少量含む。 磨耗著しい。	Ⅳ区
2	土師器 杯	(13.2) (12.8) (3.6)	内　横ナデ→黒色処理 外　口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ（→黒色処理？）	口縁部一部のみ残存 内　5YR3/1（黒褐） 外　5YR2/1（黒褐） 断　10YR7/2（にぶい黄橙）	1mm以下の黒色粒子少量含む。 きめ細かい。 外面、磨耗著しい。	Ⅳ区
3	土師器 杯	(12.8) － 〈5.2〉	内　ミガキ→黒色処理 外　口縁部横ナデ・体部ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内　5YR2/1（黒褐） 外　5YR7/4（にぶい橙）	1mmの赤色粒子、黒色粒子を含む。1mm以下の石英・長石粒子を含む。 外面、磨耗著しい。	Ⅰ区３層 Ⅳ区、Ⅱ区
4	土師器 杯	(15.1) － 〈4.8〉	内　ミガキ（→黒色処理か？） 外　口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内　5YR6/3（にぶい赤褐） 外　5YR7/2（明褐灰）	1mmの赤色粒子含む。 1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。	Ⅰ区１層 Ⅳ区
5	土師器 杯	(16.1) － 5.3	内　みこみ部ナデ→口縁部横ナデ 外　口縁下部～底部ヘラケズリ→口縁部横ナデ	口縁部3/4残存 内　2.5YR7/4（淡赤橙） 5YR5/3（にぶい赤褐） 外　2.5YR6/4（にぶい橙）	1mmの石英・長石粒子、黒色粒子、小石含む。 磨耗している。	Ⅱ区、Ⅳ区
6	土師器 小鉢	－ (6.6) 〈2.0〉	内　ミガキ→黒色処理 外　ロクロナデ→底部ヘラナデ→胴部一部ミガキ	底部1/4残存 内　7.5YR2/1（黒） 外　5YR7/2（明褐灰）	極小の石英・長石粒子少量含む。	検出
7	土師器 鉢	(19.8) 7.8 11.0	内　胴～底部ナデ→口縁部～胴中央横ナデ。（→黒色処理か？） 外　胴・底部ヘラケズリ→口縁部～胴上位横ナデ	底部完形、口縁部1/8残存 内　7.5YR7/4（にぶい橙） 外　7.5YR7/4（にぶい橙）	1～3mmの赤色粒子多く含む。 1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。	Ⅱ区、Ⅳ区
8	土師器 甕	(13.0) － 〈5.7〉	内　口縁部横ナデ 外　口縁部横ナデ→胴部ハケナデ	口縁部1/8残存 内　7.5YR7/4（にぶい橙） 外　2.5YR7/6（橙）	1mm以下の黒色粒子、石英・長石粒子含む。	Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区、検出
9	土師器 鉢	(19.8) (5.6) －	内　口縁部横ナデ→胴～底部ヘラナデ（→黒色処理か？） 外　口縁部横ナデ・胴底部ヘラケズリ	口縁部1/10、底部1/2残存 内　10YR6/1（褐灰） 5Y4/1（灰） 外　2.5Y8/2（灰白）	1mm以下の石英・長石粒子を含む。	
10	土師器 甕	(16.6) － 〈4.0〉	内　ミガキ 外　ミガキ	口縁1/6残存 内　5YR6/3（にぶい橙） 外　5YR6/3（にぶい橙）	1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子、黒色粒子含む。	Ⅳ区、カマド
11	土師器 甕	(20.7) － 〈3.7〉	内　横ナデ→ミガキ 外　横ナデ→ミガキ	口縁部1/8残存 内　7.5YR7/4（にぶい橙） 外　5YR7/4（にぶい橙）	1mmの赤色粒子、石英・長石粒子少量含む。	Ⅱ区
12	土師器 甕	－ (9.2) 〈4.1〉	内　ナデ・一部ミガキ 外　底部および底部外周ナデ・胴部ミガキ	底部1/4残存 内　7.5YR4/3（にぶい橙） 外　7.5YR8/4（淡黄橙）	1mmの赤色粒子、石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。	Ⅳ区
13	土師器 小型甕	14.5 6.8 13.0	内　口縁部横ナデ→胴～底部ハケナデ 外　口縁部横ナデ・胴・底部ヘラケズリ	ほぼ完形 内　7.5YR4/1（褐灰） 外　5YR6/2（灰褐）	2mm以下の赤色粒子多く含む。 外面磨耗。	
14	土師器 甕	(17.4) － 〈8.5〉	内　口縁部横ナデ→胴部ハケナデ 外　口縁部横ナデ→胴部ハケナデ	底部1/4残存 内　7.5YR7/3（にぶい橙） 外　7.5YR7/3（にぶい橙）	1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子、少量含む。	Ⅰ区３層 Ⅳ区
15	土師器 甕	(19.5) (6.0) －	内　口縁部横ナデ→胴～底部ヘラナデ 外　口縁部横ナデ→胴・底部ヘラケズリ	口縁部1/4、底部1/2残存 内　2.5YR5/4（にぶい赤褐） 外　2.5YR5/2（灰赤）	1～2mmの赤色粒子、石英・長石粒子多く含む。 5mm以下の小石多く含む。	Ⅰ区、Ⅰ区２層 Ⅱ区、Ⅲ区２層 Ⅰ区１層

番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土位地
16	擦石	12.5	9.3	4.0	640	安山岩。	
17	擦石	10.0	7.5	3.6	410	安山岩。	
18	こう灯石・擦石	7.5	7.2	5.1	360	安山岩。	Ⅰ区、床
19	石製模造品	5.1	2.3	0.4	10.6	滑石製未製品。	
20	白玉	3.1	〈2.9〉	0.8	12.3	滑石。	
21	白玉	1.21	1.1	0.8	2	滑石。	Ⅲ区掘方
22	白玉	1.3	1.2	0.8	2.06	滑石。	
23	土製丸玉	1.1	1.1	－	1.64		カマド
24	鉄製品	〈4.8〉	0.4	0.4	1.6		Ⅲ区１層

3）Ｈ３号住居址（第11図、第４表、図版）

本住居址はＡ－き－７グリットにあり、北中央と南側に大きな撹乱がある。住居址は浅間第１軽石流中に構築され、覆土は黒褐色を呈す。地整のズレもあり、住居址の全体がつかみきれない。南北490㎝ 東西522㎝ を測るが東西は移動した数値も含まれため、東西長488㎝ が本来の数値であろうが参考の数値である。カマドはＡＡ′セクションの北端に、焼土がみられたことから北壁にあったものと推測される。南壁に張り出しをもち、方形を呈する住居址であろう。主軸方位はＮ－０°で北を指す。地整のズレにより、住居址が所々で異なったズレを示している。ｐ３は撹乱のために顕著に西にずれたピットが断面で確認された。床面は締まっていたが移動面もほぼ同じ高さであるため、余分に締まった可能性もある。

出土遺物には須恵器長頸壺（１）、土師器杯（２～５）・鉢（６）・丸胴甕（８～９）・小型甕（11）、甑（７）、編物石（12・13）がある。

須恵器長頸壺は胴部中央に最大径を持ち、施文されず横ナデされる。体下部は回転ヘラケズリ後雑なナデ調整が施される。胎土はまれに粗い長石粒を含む。土師器杯２は有段口縁の杯、４は小さな丸底から外稜と比較的明瞭な屈曲を持って口縁が外傾外反する。５はほぼ完形で、浅く平底に近い底部が内外面に明確な稜を持って直線的開くものである。６は杯身模倣の小振りの鉢であり、内面に暗文が施どこされる。７は甑かあろうが小片である。８は大振り鉢で外面は赤みを帯び赤色塗彩された痕跡がある。11はまだ器肉は厚いがヘラケズリが強く施された武蔵甕タイプの甕底部である。

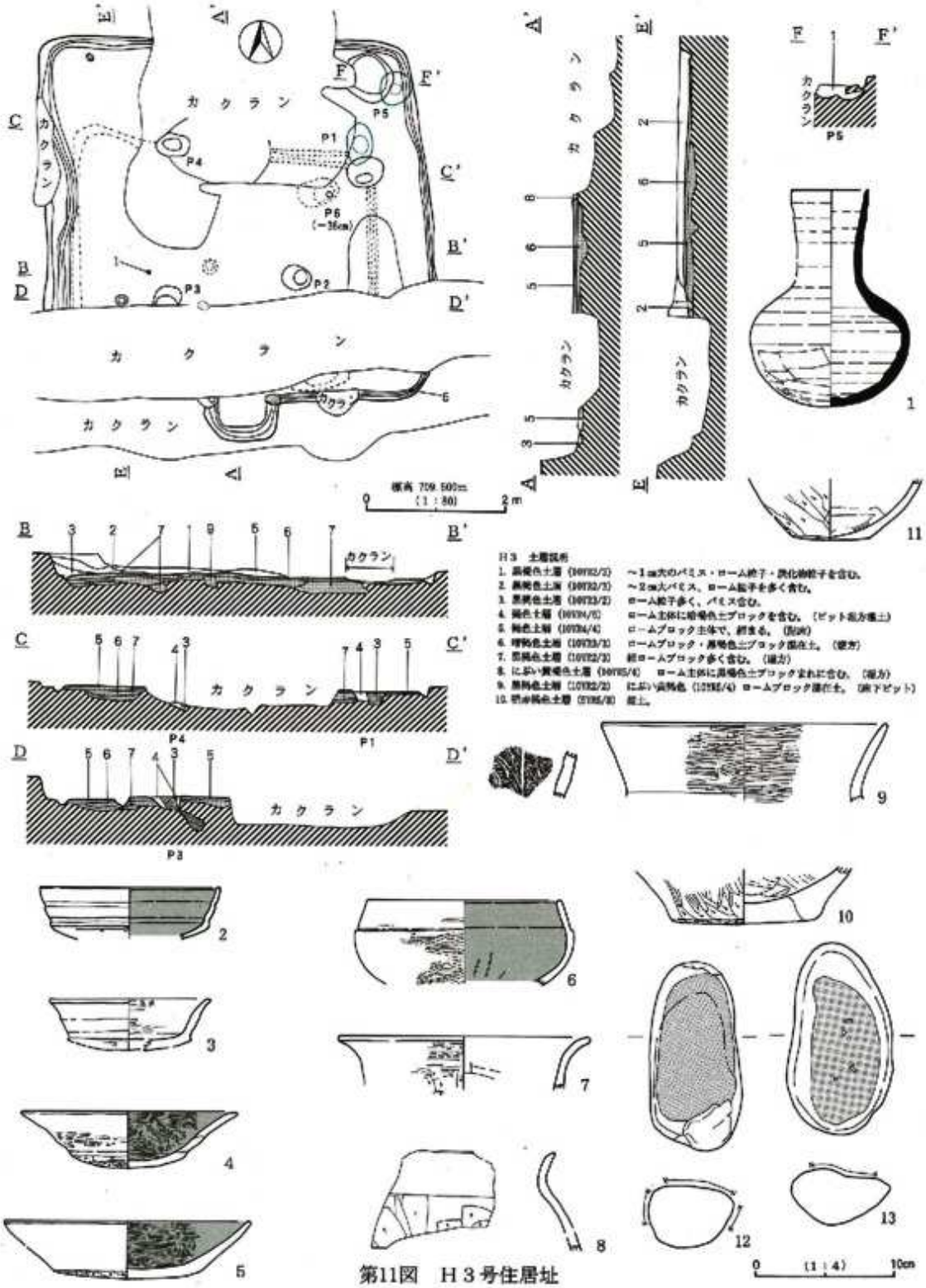
13・14の編物石には打痕やスリ面があり、編物石以外に多用された様子がある。

これらより本住居址は古墳時代後期に位置づけられよう。

第４表　Ｈ３号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	須恵器 長頸壺	(5.6) — 15.4	内　ロクロナデ 外　ロクロナデ→割下半～底部ナデ	底部完形、口縁部1/2残存 内　N6/0（灰） 外　N6/0（灰）	1mm以下の石英・長石粒子含む。	Ⅱ区 Ⅱ区床
2	土師器 杯	(13.0) (11.5) 〈3.7〉	内　横ナデ→黒色処理 外　口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ 　　口縁部に２条の沈線を施す。	口縁部1/8残存 内　5YR2/1（黒褐） 外　5YR5/1（褐灰）	きめ細かい。	Ⅳ区
3	土師器 杯	(11.6) (8.8) 3.6	内　ミガキ 外　口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ	口縁部1/12残存 内　5YR6/4（淡橙） 外　5YR8/4（淡橙）	2mm以下の赤色粒子多く含む。	Ⅱ区（？）
4	土師器 杯	(15.6) (8.2) 4.0	内　ミガキ→黒色処理 外　口縁部横ナデ→一部ミガキ・底部ヘラケズリ	口縁～底部1/4残存 内　10YR1.7/1（黒） 外　7.5YR7/3（にぶい橙） 　　7.5YR7/1（黒）	0.5mm以下の石英・長石粒子を少量含む。	検出
5	土師器 杯	(17.7) (10.6) 4.1	内　ミガキ→黒色処理 外　口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ	口縁部1/4残存、底部ほぼ完形 内　7.5YR1.7/1（黒） 外　5YR7/4（にぶい橙）	きめ細かい。1mmの石英・長石粒子、赤色粒子少量含む。 外面、剥離著しい。	
6	土師器 鉢	(13.8) — 〈6.0〉	内　みこみ部ナデ・口縁部横ナデ→暗文→黒色処理 外　底部ヘラケズリ→ミガキ→口縁部横ナデ	口縁部1/8残存 内　10YR3/1（黒褐） 外　5YR5/1（褐灰）	緻密。 1mm以下の石英・長石粒子少量含む。	検出
7	土師器 甑	(18.2) — 〈3.7〉	内　口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外　口縁部横ナデ・胴部ヘラケズリ→ミガキ	口縁部1/12残存 内　5YR6/4（にぶい橙） 外　5YR6/4（にぶい橙）	きめ細かい。 1mmの赤色粒子含む。	Ⅰ区1層 Ⅱ区
8	土師器 鉢	— — —	内　口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ（→黒色処理？） 外　口縁部横ナデ・胴部ヘラケズリ （→赤色塗彩？）	破片（口縁部が一部残る） 内　10YR3/1（黒褐） 外　2.5YR5/3（にぶい赤褐） 　　10YR8/2（灰白）	0.5mmの石英・長石粒子少量含む。	検出
9	土師器 甕	(20.5) — 〈5.5〉	内　ミガキ 外　ミガキ	口縁部1/8残存 内　5YR7/4（にぶい橙） 外　5YR7/4（にぶい橙）	1mm以下の石英・長石粒子、赤色粒子含む。	Ⅲ区、堀方
10	土師器 甕	— (10.3) 〈3.9〉	内　ヘラナデ 外　ヘラケズリ→胴部ミガキ・底部ヘラケズリ	底部1/4残存 内　5YR7/3（にぶい橙） 外　5YR7/3（にぶい橙）	1mmの石英・長石粒子、赤色粒子、黒色粒子含む。	Ⅳ区
11	土師器 甕	— — 〈4.4〉	内　ヘラナデ 外　ヘラケズリ	底部完形 内　10YR2/3（にぶい黄橙） 外　7.5YR6/2（灰褐）	1mm以下の石英・長石粒子、赤色粒子少量含む。	Ⅰ区1層 Ⅱ区1層

番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土位地
12	編物石	13.6	6.5	4.4	530	安山岩。打痕・スリ面あり。	
13	編物石	13.8	7.7	4.0	485	安山岩。スリ面あり。	


カクラン
P1
P2
P3
P4
P5
P6
(−36cm)
標高 709.500m
(1：80)
0
2m
H3 土層説明
1. 黒褐色土層 (10YR2/2) ～1cm大のパミス・ローム粒子・炭化物粒子を含む。
2. 黒褐色土層 (10YR2/3) ～2cm大パミス、ローム粒子を多く含む。
3. 黒褐色土層 (10YR3/2) ローム粒子多く、パミス含む。
4. 褐色土層 (10YR4/6) ローム土体に暗褐色土ブロックを含む。（ピット埋土）
5. 褐色土層 (10YR4/4) ロームブロック主体で、粘質る。（別掌）
6. 暗褐色土層 (10YR3/3) ロームブロック・黒褐色土ブロック混在土。（壁方）
7. 黒褐色土層 (10YR2/3) 粒ロームブロック多く含む。（壁方）
8. にぶい黄褐色土層 (10YR5/4) ローム土体に黒褐色土ブロックまれに含む。（壁方）
9. 黒褐色土層 (10YR2/3) にぶい黄褐色 (10YR5/4) ロームブロック混在土。（床下ピット）
10. 明赤褐色土層 (5YR5/8) 焼土。
(1：4)
10cm

第11図　H３号住居址

4）Ｈ４号住居址（第12図、第５表、図版２・35）

Ａく６グリットにあり、住居址の大半は調査区域外で調査できなかった。住居址の南端にあたる南北間148cm を調査することができた。東西は520cm を測る。ローム層中に構築され、覆土は黒褐色を呈す。調査遺構内ではカマドは検出されていない。本住居址も壁が床面で30cm 程西に移動していた。

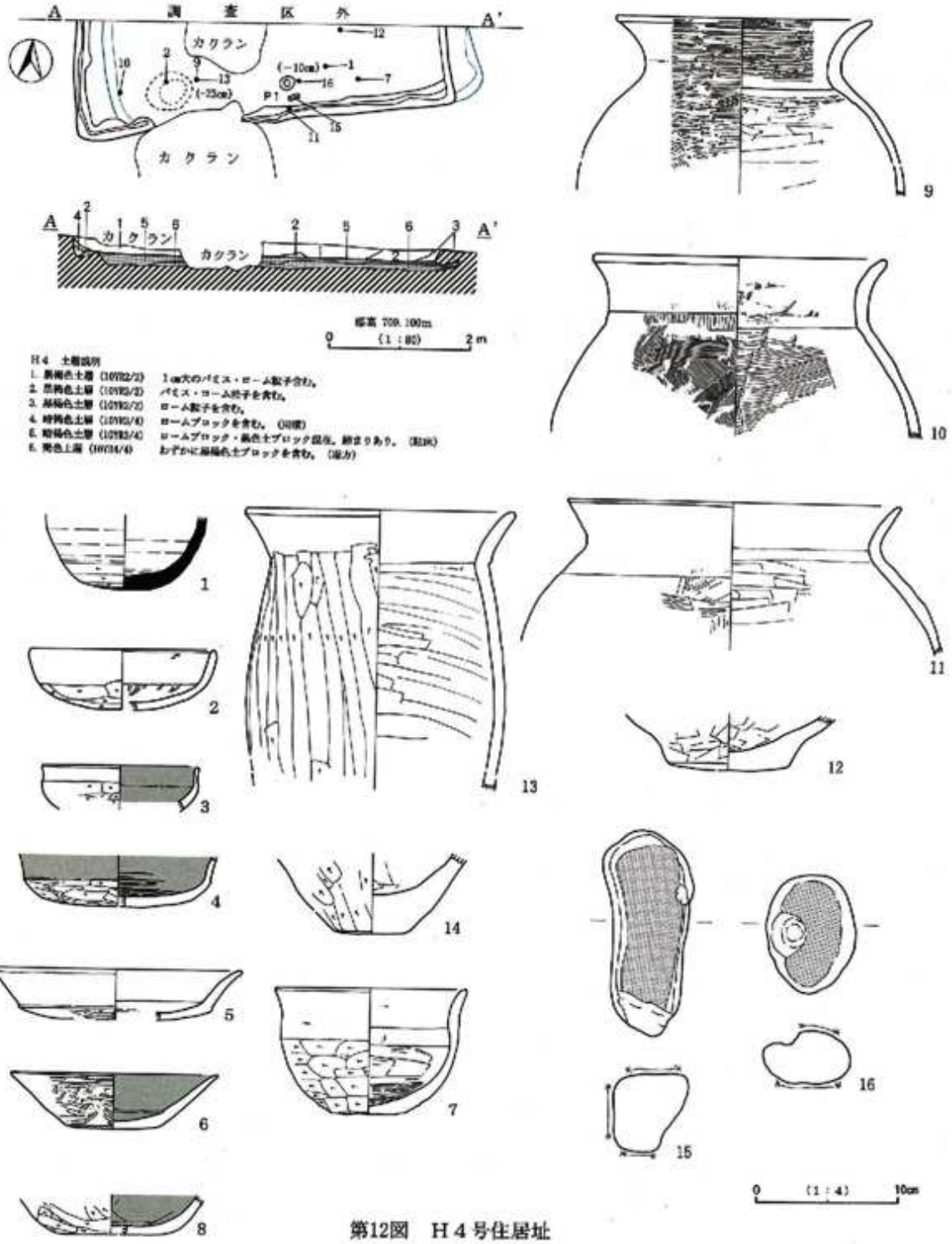
出土遺物は多く、須恵器壺（１）、土師器杯（２～６）・鉢（７・８）・丸胴甕（９～12）・長胴甕（13・14）・編物石（15）、軽石製の凹石（16）がある。

須恵器壺は胎土分析の結果、猿投系と鑑定され、色調的にも灰白色を呈し、内面にモスグリーンの自然釉が付着している。体下部外面は回転ヘラケズリ調整される。２の杯は厚手でヘラケズリによって、口縁部との外稜が作られ口縁部との境が作り出されている。３・４は杯身の模倣杯のであろうか丸底からわずかに屈曲し、口縁が直立気味な杯である。５は口縁が外稜を持って大きく外反している。外面は漆けた黒色を呈している。６は平底気味の底部から内外に稜を持って口縁部が直線的に外傾するもので、口縁部は丁寧にミガキ調整され、内面は黒色処理される。７は内面はナデ調整のままであるが、器形から鉢とした。９～11は丸胴甕胴上半部であるが、調整が異なっている。９は口縁から胴部にかけて外面が丁寧にミガキ調整され、10は胴部はハケ目を残したままで、ヘラケズリ調整もされていない。11は胴部外面にヘラケズリされ、わずかなミガキ調整がある。13長胴甕は、胴部外面が丁寧にヘラケズリされ、14の底部は厚みをもっている。

これらの土器群は古墳時代後期に位置づけられよう。

第５表　Ｈ４号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	須恵器 壺	— — 〈5.2〉	内　ロクロナデ 外　ロクロナデ→底部切り離し→底部と外周に回転ヘラケズリ	底部完形 内　N7/0（灰白） 外　N7/0（灰白）	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。 内外面に自然釉付着。	
2	土師器 杯	(13.2) — 4.3	内　口縁部横ナデ・みこみ部ナデ→一部ミガキ 外　口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内　5YR7/4（にぶい橙） 外　5YR7/4（にぶい橙）	1mmの赤色粒子多く含む。 石英・長石粒子少量含む。	
3	土師器 杯	(11.2) — 〈3.2〉	内　ミガキ→黒色処理 外　底部ヘラケズリ→口縁部横ナデ	口縁部1/8残存 内　2.5YR2/1（黒） 外　7.5YR6/2（灰褐） 7.5YR7/4（にぶい橙）	きめ細かい。 1mmの赤色粒子、石英・長石粒子を少量含む。	
4	土師器 杯	— (13.2) 〈3.6〉	内　口縁部横ナデ・みこみ部ナデ→ミガキ→黒色処理 外　口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ	底部1/4残存 内　5YR5/3（にぶい赤褐） 外　5YR5/3（にぶい赤褐）	1mm以下の石英・長石粒子少量含む。	
5	土師器 杯	(17.8) (13.6) 〈3.6〉	内　口縁部横ナデ（→黒色処理？） 外　底部ヘラケズリ→口縁部横ナデ（→黒色処理？）	口縁部1/24、底部1/8残存 内　7.5YR8/4（淺黄橙） 外　10YR4/1（褐灰）	1mmの赤色粒子含む。	
6	土師器 杯	(14.6) (6.6) 3.9	内　ミガキ→黒色処理 外　ミガキ・底部ミガキ	口縁部1/3、底部1/2残存 内　10YR1.7/1（黒） 外　7.5YR6/3（にぶい褐）	1mm以下の石英・長石粒子、赤色粒子含む。	
7	土師器 鉢	(13.5) (5.3) 8.8	内　胴～底部ナデ→口縁部横ナデ 外　胴・底部ヘラケズリ→口縁部横ナデ	口縁部1/4、底部3/4残存 内　5YR7/4（にぶい橙） 外　5YR7/4（にぶい橙）	1～4mmの赤色粒子を含む。 1mmの石英・長石粒子を少量含む。	
8	土師器 鉢	— (8.0) 〈2.9〉	内　ヘラナデ→黒色処理 外　ヘラケズリ	底部1/4残存 内　10YR4/1（褐灰） 外　7.5YR6/3（にぶい褐）	1mmの赤色粒子、石英・長石粒子、黒色粒子含む。	
9	土師器 甕	(18.0) — 〈12.3〉	内　口縁部横ナデ→ミガキ・胴部ヘラナデ 外　ミガキ	口縁部1/8残存 内　10YR7/3（にぶい黄橙） 外　10YR7/4（にぶい黄橙）	きめ細かい。 1mmの黒色粒子、石英・長石粒子を少量含む。	
10	土師器 甕	(20.8) — 〈12.6〉	内　口縁部横ナデ→胴部ハケメ 外　胴部ハケメ→口縁部横ナデ	口縁部1/10残存 内　10YR8/3（淺黄橙） 5Y4/1（灰） 外　10YR8/3（淺黄橙）	4mm以下の赤色粒子含む。	
11	土師器 甕	(23.6) — 〈10.4〉	内　口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外　口縁部横ナデ→胴部ハケナデ→ミガキ	口縁部一部分、頸部1/6残存 内　7.5YR7/4（にぶい橙） 外　5YR7/4（にぶい橙）	1mmの赤色粒子、石英・長石粒子少量含む。小石含む。 内面、口縁部剥離。 外面、磨耗著しい。	
12	土師器 甕	— (8.7) 〈4.0〉	内　ヘラナデ 外　胴部ヘラナデ・底部ヘラケズリ（磨耗していて、単位の判別できない）	底部1/2残存 内　7.5YR8/4（淺黄橙） 外　7.5YR7/4（にぶい橙）	1mm以下の赤色粒子を少量含む。	
13	土師器 甕	19.1 — 〈19.6〉	内　口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外　口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部1/2残存 内　7.5YR4/1（褐灰） 外　7.5YR7/3（にぶい橙）	1mm以下の石英・長石粒子を少量含む。	
14	土師器 甕	— 5.0 〈5.7〉	内　ヘラナデ 外　ヘラケズリ	底部ほぼ完形 内　5YR6/4（にぶい橙） 外　5YR5/1（褐灰）	5mm以下の赤色粒子含む。 1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。	



第12図　H４号住居址

番号	種　類	長さ	巾	厚さ	g	備　考	出土位地
15	編物石	14.6	6.6	5.6	745	安山岩。擦痕あり。	
16	凹石	8.4	6.3	3.8	85	軽石。擦痕あり。	

5）Ｈ５号住居址（第13図、第６表、図版２・36）

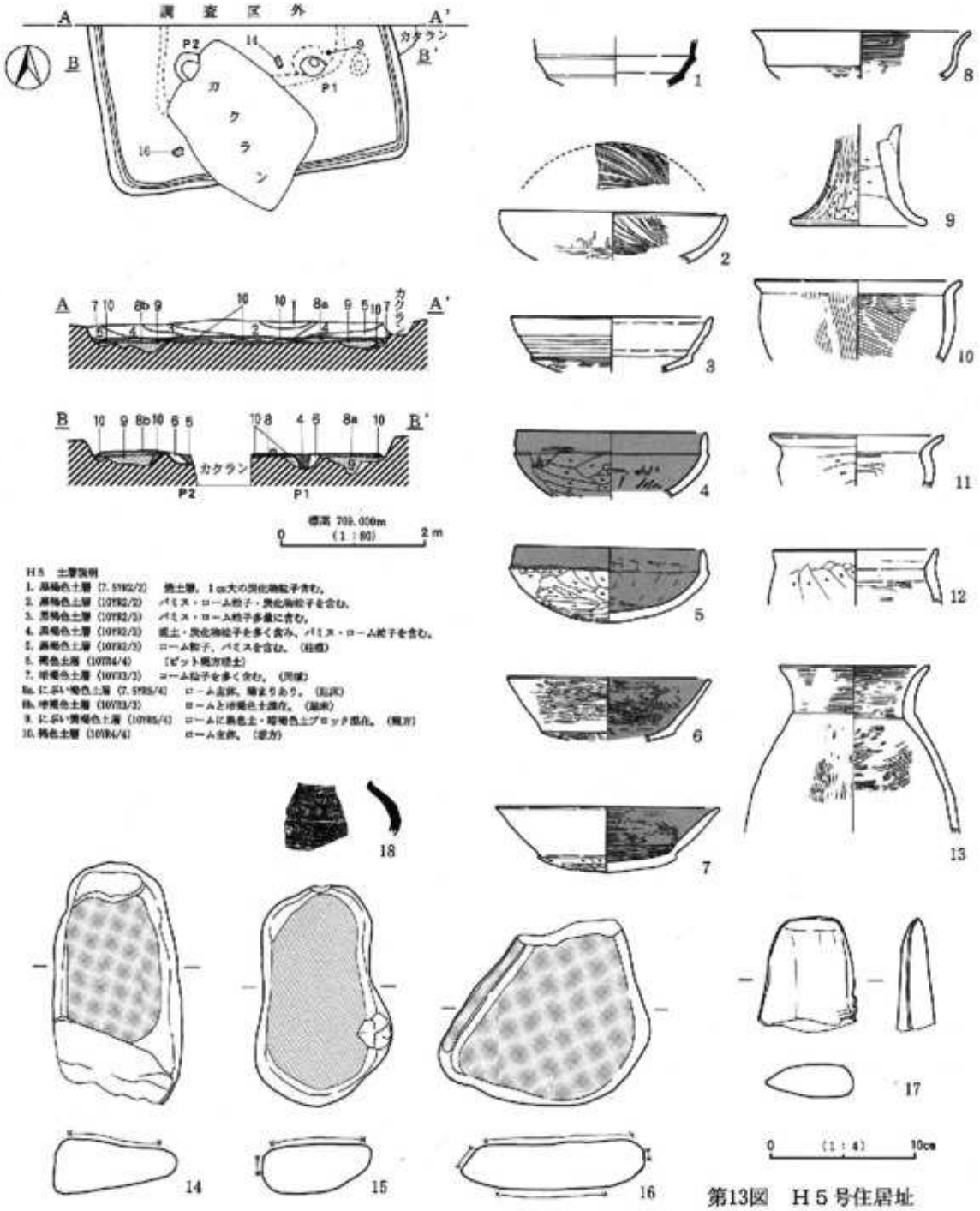
Ａこ６グリットにあり、北半域は調査区域外である。住居址の約南半分の調査を行った。検出面、構築土層はＰ１のローム中である。覆土は黒褐色を呈する。本住居址では撹乱により破壊を受けているが、住居址のズレは看取できなかった。しかし、柱穴のセクションをみると水平に切れているので、床下でズレがあったかもしれない。東西長386㎝を測り、カマドは調査区域では検出されていない。主軸方位はＮ－14°－Ｗを指す。

出土遺物には須恵器と土師器・編物石・砥石がある。須恵器は高杯祈部（１）と拓本に示した壺の胴部片（18）がある。土師器は杯（２～７）、鉢（８・10～12）、高杯（９）、長胴のミガキ甕(13)である。須恵器高杯は破片であるが長脚の高杯の杯部であろうか。陶器山85（ＭＴ85）あたりと類似している。18は長頸壺か瓶の胴部片である。高蔵23型式（ＴＫ23）の所産かと思われる。混入品であろう。土師器杯は１は口縁が全体に内湾する器形で内面には放射状の暗文が残る。３の杯は有段口縁の杯で丸底から外稜を持って屈曲し、口縁に沈線に近い２条の段を有す。黒色を帯びず橙色である。４・５は須恵器杯身模倣の杯で深い丸底から、口縁部は少し屈曲して、短く直立する。外面底部はヘラケズリ、口縁部横ナデされ、内面はミガキ黒色処理される。６・７は浅い平底に近い底部から内外に外稜を持って口縁部が直線的に外傾するものである。内面のミガキ黒色処理は同じであるが、６の外面は全面にミガキ、７は口縁部横ナデ、底部ヘラケズリ調整のままである。９の高杯脚部は柱状で、裾部は短い。外面はヘラケズリ後ミガキ調整される。13のミガキ甕は細く丁寧に内外がミガキ調整され、胎土は緻密で白っぽい。17は白色の凝灰岩製で砥石であろうか。

これらより、本址は古墳時代後期に位置づけられよう。

第６表　Ｈ５号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	須恵器 高杯	－ － 〈3.4〉	内　ロクロナデ 外　ロクロナデ	破片 内　N8/0（灰白） 外　N8/0（灰白）	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。 自然釉付着。	
2	土師器 杯	(15.5) － 〈3.3〉	内　横ナデ→放射状の暗文を施す 外　横ナデ→体部ミガキ	口縁部1/10残存 内　7.5YR7/4（にぶい橙） 外　5YR7/4（にぶい橙）	きめ細かい。 1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子少量含む。 放射状暗文あり。	郡区
3	土師器 杯	(14.0) (11.2) 〈3.8〉	内　横ナデ 外　口縁部横ナデ→底部ミガキ 　　口縁部に２条の沈線を施す	口縁部1/8残存 内　7.5YR8/3（浅黄橙） 外　2.5YR6/3（にぶい橙）	きめ細かい。 1mmの赤色粒子少量含む。	
4	土師器 杯	(13.2) － 〈4.5〉	内　口縁部横ナデ→みこみ部ミガキ→黒色処理 外　口縁部横ナデ→体部ヘラケズリ→一部ミガキ→黒色処理	口縁部1/2残存 内　7.5YR3/1（黒褐） 外　7.5YR3/1（黒褐） 断　10YR8/3（浅黄橙）	1mmの赤色粒子、石英・長石粒子含む。きめ細かい。 外面、体部磨耗著しい。	
5	土師器 杯	13.1 － 5.1	内　口縁～体部横ナデ→みこみ部ミガキ→黒色処理 外　口縁部横ナデ→ミガキ・体～底部ヘラケズリ→口縁部黒色処理	口縁部3/4残存 内　7.5YR1.7/1（黒） 外　5YR8/3（浅黄橙）	1mmの赤色粒子、石英・長石粒子含む。	
6	土師器 杯	(14.0) (9.2) 〈4.3〉	内　ミガキ→黒色処理 外　ミガキ・底部ミガキ	口縁部1/4残存 内　10YR1.7/1（黒） 外　2.5YR6/6（橙）	1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子含む。	
7	土師器 杯	(15.4) (9.5) 4.4	内　ミガキ→黒色処理 外　口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ	口縁～底部1/2残存 内　10YR1.7/1（黒） 外　5YR8/3（浅黄橙）	1mmの赤色粒子、石英・長石粒子含む。	
8	土師器 鉢	(15.2) － 〈3.4〉	内　ミガキ 外　口縁部横ナデ・底部ミガキ	口縁部1/8残存 内　7.5YR5/3（にぶい褐） 外　7.5YR5/3（にぶい褐）	1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子含む。	
9	土師器 高杯 (脚部)	－ 9.4 〈7.0〉	内　裾部横ナデ→脚柱部ヘラケズリ 外　ケズリ→ミガキ	脚部完形 内　5YR7/4（にぶい橙） 外　N3/0（暗灰）	1mm以下の赤色粒子、黒色粒子含む。0.5mm以下の石英・長石粒子含む。	
10	土師器 鉢	(14.4) － 〈5.6〉	内　胴部ハケメ→口縁部横ナデ 外　口縁部横ナデ・胴部ハケナデ	口縁部1/8残存 内　7.5YR7/4（にぶい橙） 外　5YR6/2（灰褐）	1mmの黒色粒子、石英・長石粒子多く含む。	Ⅲ区
11	土師器 鉢	(12.0) － 〈3.5〉	内　口縁部横ナデ・胴部ヘラナデ 外　口縁部横ナデ・胴部ヘラケズリ	口縁部1/8残存 内　10YR6/2（灰黄褐） 外　5YR7/4（にぶい橙）	2mm以下の赤色粒子、黒色粒子、石英・長石粒子多く含む。	
12	土師器 鉢	(11.4) － 〈3.8〉	内　口縁部横ナデ・胴部ナデ→ミガキ 外　口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内　2.5YR5/2（灰赤） 　　2.5YR3/1（暗赤灰） 外　2.5YR6/3（にぶい橙）	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。	
13	土師器 甕	(10.4) － 〈11.6〉	内　ミガキ（胴部ハケナデ→ミガキ） 外　ミガキ	口縁部1/2残存 内　5YR7/3（にぶい黄橙） 外　5YR7/3（にぶい黄橙）	1mm以下の石英・長石粒子少量含む。 磨耗している。	



第13図　H５号住居址

番号	種　類	長さ	巾	厚さ	g	備　考	出土位置
14	擦石	16.5	8.9	3.8	825	安山岩。	
15	擦石・敲物石	15.2	9.6	3.6	630	安山岩。	
16	擦石	12.9	14.5	3.6	945	安山岩。	
17	砥石	〈3.9〉	3.4	1.3	15.6	凝灰岩。	

6）Ｈ６号住居址（第14図、第７表、図版３・36）

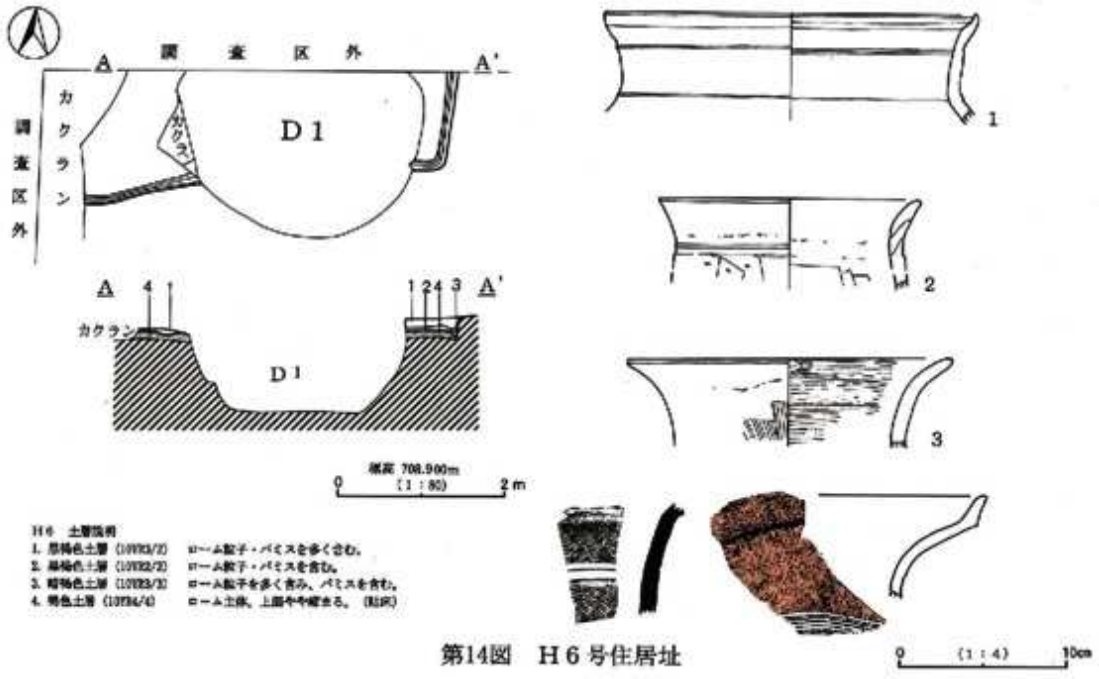
Ｂい６グリットにあり、北側大半を調査区域外のため調査できず、東は攪乱され、Ｄ１と重複し壊され、住居址は床面の一部のみ調査できた。本址は、部分的あるためか地盤のズレは確認できなかった。柱穴・カマドは調査区域内では検出されなかった。

出土遺物には土師器・須恵器・弥生式土器がある。弥生式土器は赤色塗彩の破片が多いが図示したものは口縁がＬ字状を呈す受け口の壺の口縁部片である。赤色塗彩され、頸部には櫛描文が施文される。

須恵器は甕の口縁部片で、外面に波状文が施文され、中位には２条の沈線の間に突帯をつくり出している。高蔵23型式あたりのものであろうか。断面の色調は陶邑のものと同色を呈している。

土師器は破片はあるものの実測個体は少ない。丸胴甕（１）、小型甕（２）、長胴甕（３）がある。実測できなかったが、口縁が内稜を持って外方に折れ、底部は深く、内外に暗文を施すもの。高杯は杯部、内外面と脚部に暗文を施すものがみられる。１は丸胴甕の口縁部で、口縁部は内外横ナデされ、端部は内湾直立している。Ｈ10.12の丸胴甕と接合し、同一個体。３は胴部外面にハケ目が残る。器形が全体でわからないが、まだ長胴化していない甕なのであろうか。破片には底部の底厚が3.5cm 程のものもある。

破片資料で明確にはいえないが、古墳時代後期に位置づけられよう。



第14図　Ｈ６号住居址

第７表　Ｈ６号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	土師器 甕	(22.2) － 〈6.3〉	内　横ナデ 外　横ナデ	口縁部1/4残存 内　10YR7/3（にぶい黄橙） 外　7.5YR8/3（浅黄橙）	1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子少量含む。	Ⅱ区
2	土師器 甕	(15.5) － 〈5.3〉	内　口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外　口縁部横ナデ・胴部ヘラケズリ	口縁部1/5残存 内　5YR6/4（にぶい橙） 　　5YR4/1（褐灰） 外　5YR6/4（にぶい橙）	1mmの石英・長石粒子、小石含む。	Ⅱ区
3	土師器 甕	(19.2) － 〈5.2〉	内　ハケナデ 外　口縁部横ナデ・胴部ハケナデ	口縁部1/5残存 内　5YR7/4（にぶい橙） 外　7.5YR7/4（にぶい橙）	2mmの赤色粒子、黒色粒子含む。	Ⅳ区

7）H７号住居址（第15図、第８表、図版３・36・37・57）

本住居址はＣく１グリットにあり、西で撹乱される。ここでも地盤のズレがが確認され、床面で20～30㎝、床下のロール層中で100㎝ 程西に動いている。住居址の規模は南北長576㎝、東西長556㎝ で南側に150㎝ ほどの張り出しが検出された。カマドは北壁にあり、暗褐色を呈す粘質土で構築されていた。灰・焼土が火床に残っていたが、移動したため、堀方は明瞭ではなく、東に、煙道の底面だけが残っていたりした。主柱穴は４本検出され、北東と南西にもピットがあった。南側中央にも出入り口に関連する柱穴が多くみられる。

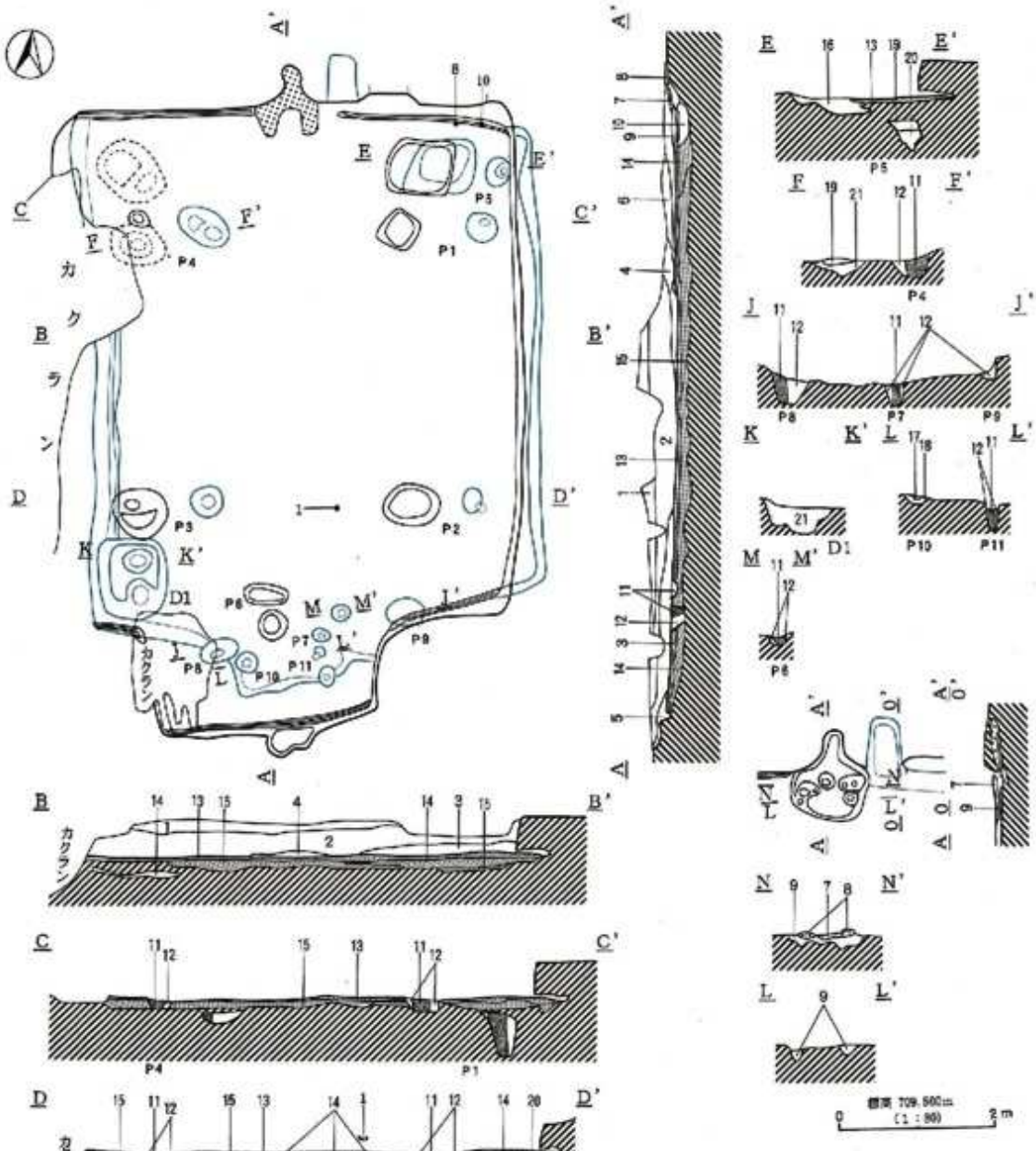
出土遺物には弥生式土器、須恵器、土師器、褐釉石(13)、石鏃（14、掲灰色チャート製）がある。弥生式土器は口縁端部に櫛描文、頸部に櫛描簾状文の無彩の壺、波状文・斜条痕の甕片がある。赤色塗彩の杯・壺片もみられる。縄文の土器片もみられた。

須恵器は拓本に示した甕の胴部片である(16)。胎土分析では陶邑産とされた。土師器は杯（１～５）・鉢（６～８）・長胴甕(11・12)・甑(10)がある。１は須恵器蓋の模倣杯で、丸底から外稜を持ってやや屈曲し、口縁が直立する。内面は口縁部横ナデ、底部ナデ、外面は口縁部横ナデ、底部ヘラケズリされ均一な仕上げである。２は小さな丸底から外稜を持ち、屈曲し口縁が直線的に外傾する。内外ミガキ調整され、内面は黒色処理される。３は１と同様の器面調整

第８表　Ｈ７号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	土師器 杯	13.5 12.8 4.8	内　横ナデ～みこみ部～部ナデ 外　口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ	ほぼ完形 内　5YR7/3（にぶい橙） 外　5YR7/3（にぶい橙）	1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子、黒色粒子を少量含む。	Ⅱ区 Ⅱ区２層
2	土師器 杯	— (8.2) 〈3.3〉	内　ミガキ～黒色処理 外　ミガキ	底部1/2残存 内　10YR4/2（灰黄褐） 外　2.5YR5/6（橙）	きめ細かい。 1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。	Ⅳ区
3	土師器 杯	(13.4) (11.7) 4.6	内　みこみ部ヘラナデ→横ナデ 外　底部ヘラケズリ→口縁部横ナデ	口縁部1/4残存 内　5YR7/4（にぶい橙） 外　5YR7/4（にぶい橙）	1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子、黒色粒子を少量含む。	Ｐ５
4	土師器 杯	(13.1) — 4.5	内　口縁部横ナデ・みこみ部ナデ～暗文状ミガキ 外　口縁部横ナデ～体部ヘラケズリ	口縁部1/2残存 内　5YR8/4（淡橙） 外　2.5YR7/6（橙） 7.5YR7/2（明褐灰）	2.5mm以下の赤色粒子多く含む。 1mm以下の石英・長石粒子含む。 摩耗している。	床
5	土師器 杯	(13.6) 11.5 4.5	内　横ナデ暗文状ミガキ→黒色処理 外　口縁部横ナデ～底部ヘラケズリ	口縁部1/2残存 内　10YR4/1（褐灰） 外　10YR8/3（浅黄橙） （外面一部黒色）	1mmの赤色粒子含む。	Ｐ４・堀方
6	土師器 鉢	13.4 7.9 9.5	内　口縁部横ナデ～胴～底部ヘラナデ 外　口縁部横ナデ・胴部ナデ・底部ヘラケズリ	口縁部3/4残存、底部完形 内　7.5YR8/4（浅黄橙） 外　7.5YR8/3（浅黄橙） 7.5YR7/2（明褐灰）	きめ細かい。 1mmの赤色粒子少量含む。	Ｐ４
7	土師器 鉢	(14.0) 8.4 12.1	内　口縁部横ナデ～胴～底部ヘラナデ 外　口縁部横ナデ～胴・底部ヘラケズリ	口縁部1/2残存、底部完形 内　10YR7/3（にぶい黄橙） 外　7.5YR7/3（にぶい橙） 7.5YR6/2（灰褐）	きめ細かい。 1mm前後の黒色粒子、赤色粒子含む。	Ｐ５
8	土師器 鉢	15.2 8.0 14.7	内　胴部ハケナデ～底部～胴下半部ナデ→口縁部横ナデ（→黒色処理？） 外　胴部ヘラケズリ・底部ヘラケズリ→口縁部横ナデ	口縁部3/4残存、底部完形 内　7.5YR7/4（にぶい橙） 7.5YR4/1（褐灰） 外　5YR7/3（にぶい橙）	緻密。 1mmの赤色粒子、石英・長石粒子含む。	Ⅰ区３層
9	土師器 甕	— (6.0) 〈2.7〉	内　ハケナデ 外　胴部ナデ～ミガキ・底部ヘラケズリ	底部1/2残存 内　10YR2/1（黒） 外　5YR7/4（にぶい橙）	1mm以下の黒色粒子、赤色粒子少量含む。1mm程度の石英・長石粒子含む。	Ⅰ区２層
10	土師器 甑	16.7 6.2 13.7	内　胴～底部ハケナデ→口縁部横ナデ 外　胴・底部ヘラケズリ→口縁部横ナデ→内外黒色処理	口縁部・底部完形 内　10YR3/1（黒褐）～黒色処理 粗 外　7.5YR6/1（褐灰）	緻密。1mm以下の赤色粒子、黒色粒子含む。 焼成後一孔穿孔。二次利用。	Ⅰ区２層 Ⅰ区２・３層
11	土師器 甕	(18.0) (7.6) —	内　胴上半ヘラナデ→口縁部横ナデ・胴下半～底部ハケナデ 外　口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ・底部ヘラケズリ	口縁部1/4、底部1/2残存 内　7.5YR7/3（にぶい橙） 外　5YR7/4（にぶい橙）	緻密。 1mm以下の黒色粒子、3mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子含む。	Ⅰ区２層 Ⅰ区２・３層
12	土師器 甕	(14.6) — 〈12.7〉	内　口縁部横ナデ・頸部ヘラナデ 外　口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内　5YR7/4（にぶい橙） 外　2.5YR6/6（橙）	粗い。1mmの石英・長石粒子、赤色粒子、黒色粒子多く含む。 小石含む。	Ⅳ区
13	土師器 高杯	(7.1)	内　杯部ミガキ→（黒色処理？） 脚裾部横ナデ→脚柱部ヘラナデ 外　脚部ミガキ	脚部残存 内　7.5YR8/4（浅黄橙） 外　7.5YR7/2（明褐灰）	1mmの石英・長石粒子、赤色粒子、黒色粒子多く含む。小石含む。	Ⅱ区

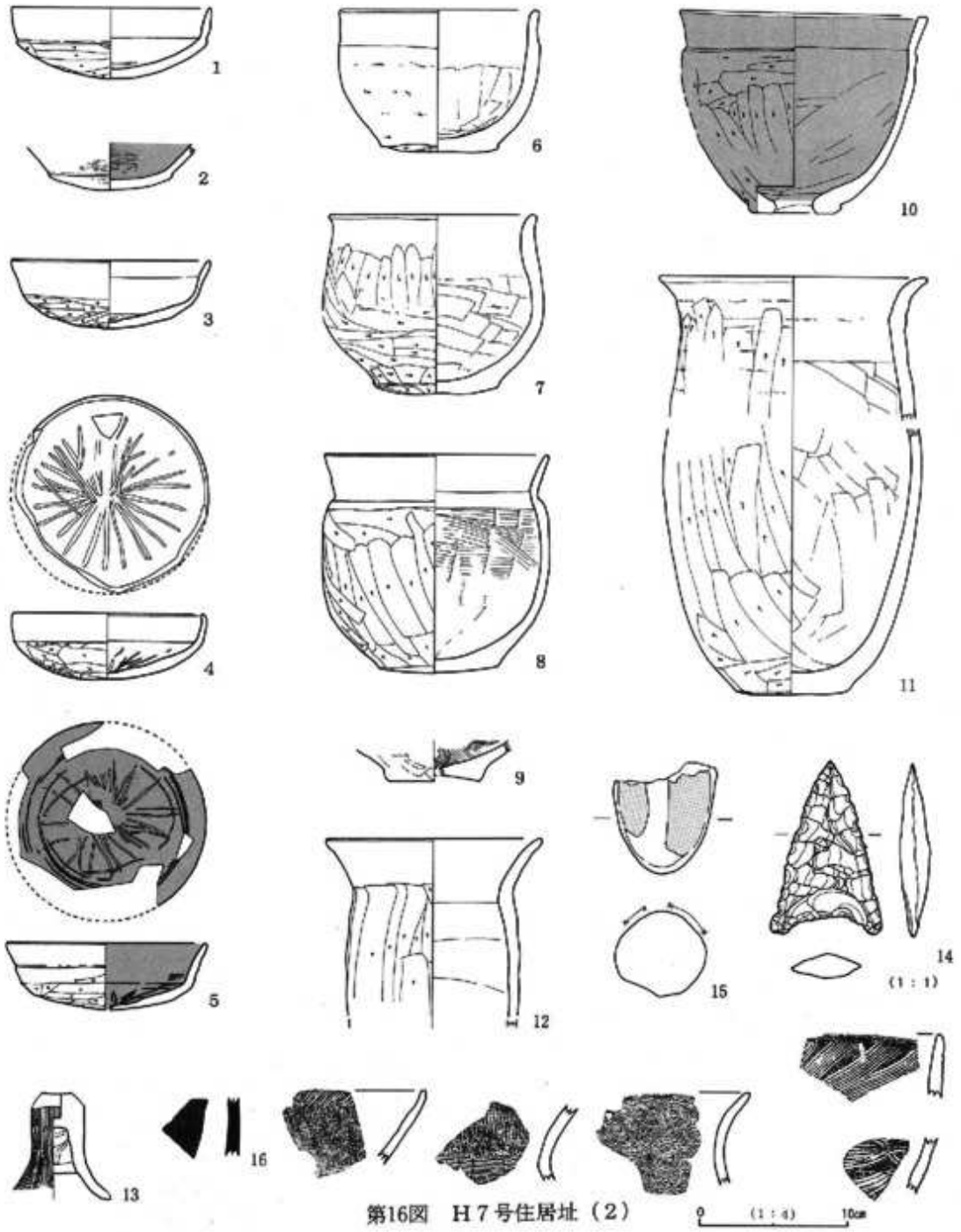
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土位地
14	石鏃（完）	3.0	1.9	0.5	1.7	掲灰色チャート。	
15	旅石	7.5	7.0	5.7	115	粗石。	



H7　土層説明

1. 黒褐色土層（10YR2/2）　ローム粒子・パミスを含む。
2. 黒褐色土層（10YR2/2）　ローム粒子・～1㎝大のパミスを多量に含む。
3. 褐色土層（10YR4/4）　ローム粒子を多く含み、パミスを含む。
4. 黒褐色土層（10YR2/3）　ローム粒子・パミスを含む。
5. 暗褐色土層（10YR3/3）　ローム粒子を多く含みパミスを含む。
6. 黒褐色土層（10YR3/2）　ローム粒子・～1㎝大のパミスを多く含み、焼土・炭化物・灰を含む。
7. 黒褐色土層（7.5YR3/3）　上層は灰を多量に含む。炭化物・焼土を含む。粘質土。
8. 暗褐色土層（7.5YR3/3）　粘土ブロック主体、焼土粒子を含む。（カマド構築土）
9. 暗褐色土層（10YR3/3）　粘土ブロック・焼土ブロックを含む。（カマド堆積土）
10. 暗褐色土層（7.5YR3/3）　粘土ブロック・ロームブロック・黒色土ブロック少々、焼土粒子を含む。（カマド堆積土）
11. 暗褐色土層（10YR3/3）　ローム粒子を含む。（住居）
12. にぶい褐色土層（7.5YR5/4）　ロームブロックを多量に含む。（ピット埋土）
13. 黒褐色土層（10YR2/3）　ロームブロック・黒褐色土ブロック混在。
　　締まりあり。（貼床）
14. 黒褐色土層（10YR2/2）　黒褐色土ブロックにロームブロックを含む。
15. にぶい褐色土層（7.5YR5/4）　ローム主体。炭ゃに14層をブロックで含む。
16. 暗褐色土層（10YR3/3）　炭化物を多量に含む。
17. 黒褐色土層（10YR2/2）　（住居）
18. 黒褐色土層（10YR2/2）　ロームと黒褐色土混在。
19. 黒褐色土層（10YR3/3）　ローム粒子を多く含み、黒褐色土ブロック・焼土粒子を含む。
20. 暗褐色土層（7.5YR3/3）　ロームを多量に含む。
21. 褐色土層（10YR4/4）　ローム粒子・パミスを多く含む。

第15図　Ｈ７号住居址（１）



第16図　H７号住居址（２）

であるが、１に比べると口縁と底部の稜が明確ではない。４は杯身の模倣なのであろうか、口縁端部が内傾する。内面には放射状の暗文がみらる。５は内面に暗文をもち、黒色処理され口縁は中位に沈線を持ち外反する。３～５は口縁と底部が明瞭な稜を作り出さず、曖昧である。また形もゆがみがある。６・７の鉢は口縁部が短く外反する同器形で大小、８は胴部と口縁部の間を屈曲させ直線的に口縁が外傾している。いずれも厚手である。10は底部に焼成後穿

孔した甕でる。小型甕の２次利用であろうか。口縁と胴部は稜線を持っては屈曲し明瞭である。黒色処理されるが有段口縁杯の黒色処理同様に煤けた感触である。11の長胴甕は口縁が短く外反し、底径が大きい底部である。15は高杯の脚部であるが、円柱状を呈し、外面ミガキ調整される。裾部は一様に欠けているため２次利用の可能性もある。

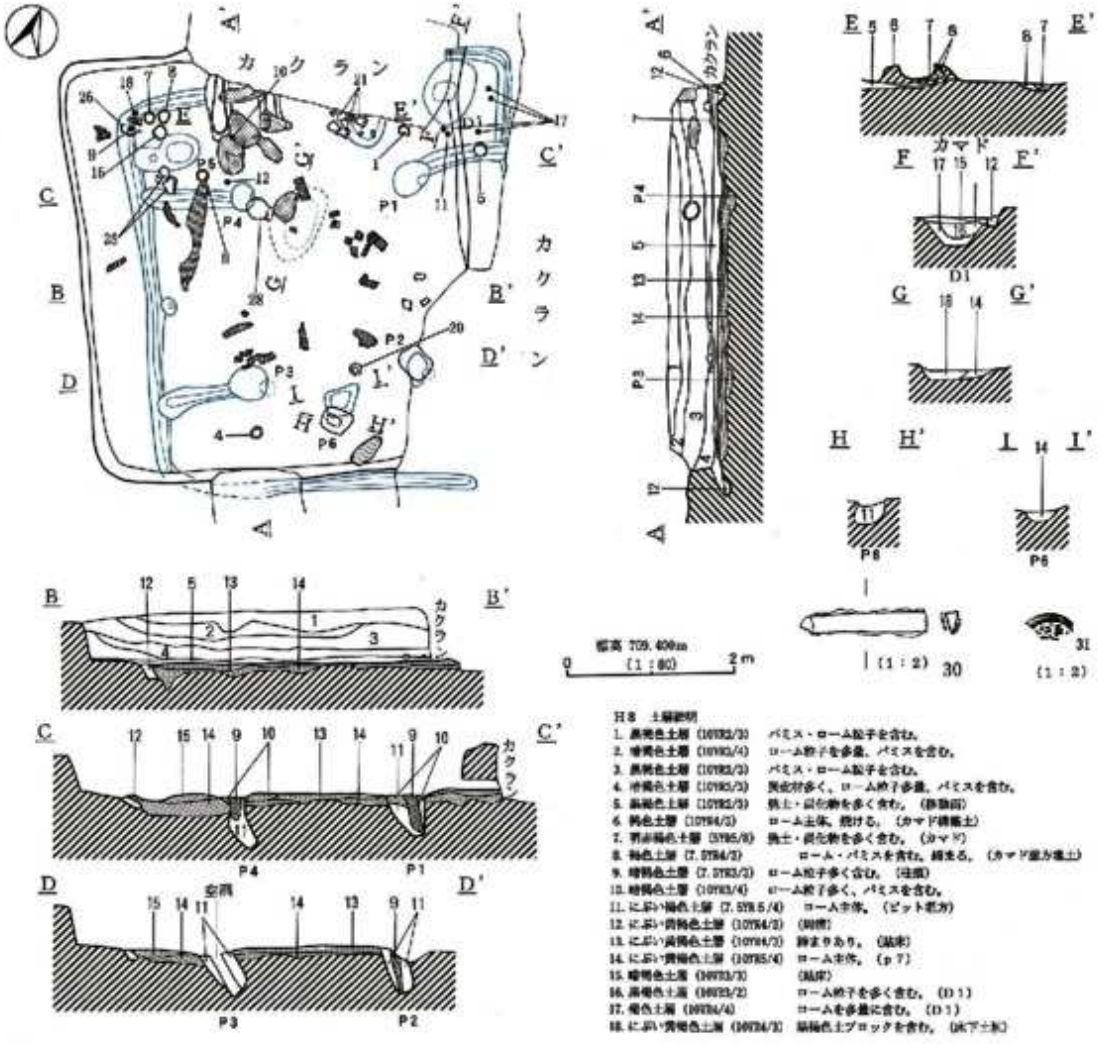
これらより、本址は古墳時代後期に位置づけられよう。

８）Ｈ８号住居址（第17～19図、第９表、図版４・５・37～39・57）

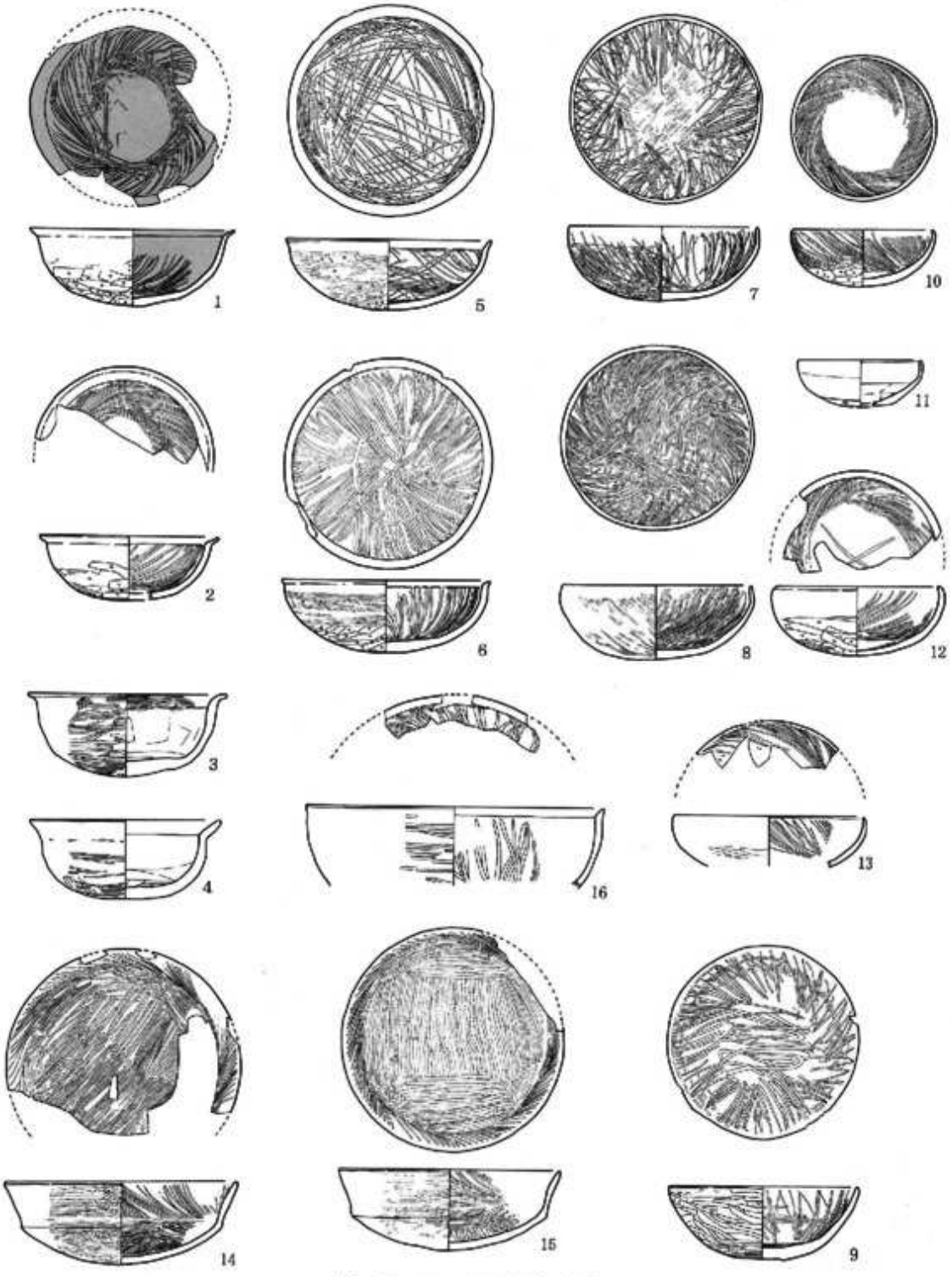
Ｃこ３グリットにあり、北と東に大きい攪乱が入る。本住居址も床面近くで50cm 西に移動し、柱穴も傾斜している。南北長452cm、東西長436cm の方形を呈す。カマドは北壁にあり、主軸方位はＮ－28°－Ｗを指す。ローム層中に構築された住居址で覆土は黒褐色を呈す。焼失家屋で多量の炭化材・土器が検出された。

カマドは地山のロームを掘り残して袖とし、その上に礫を組んで構築していた。周溝を壁下にもち、４本の主柱穴に壁から間仕切り溝が検出された。

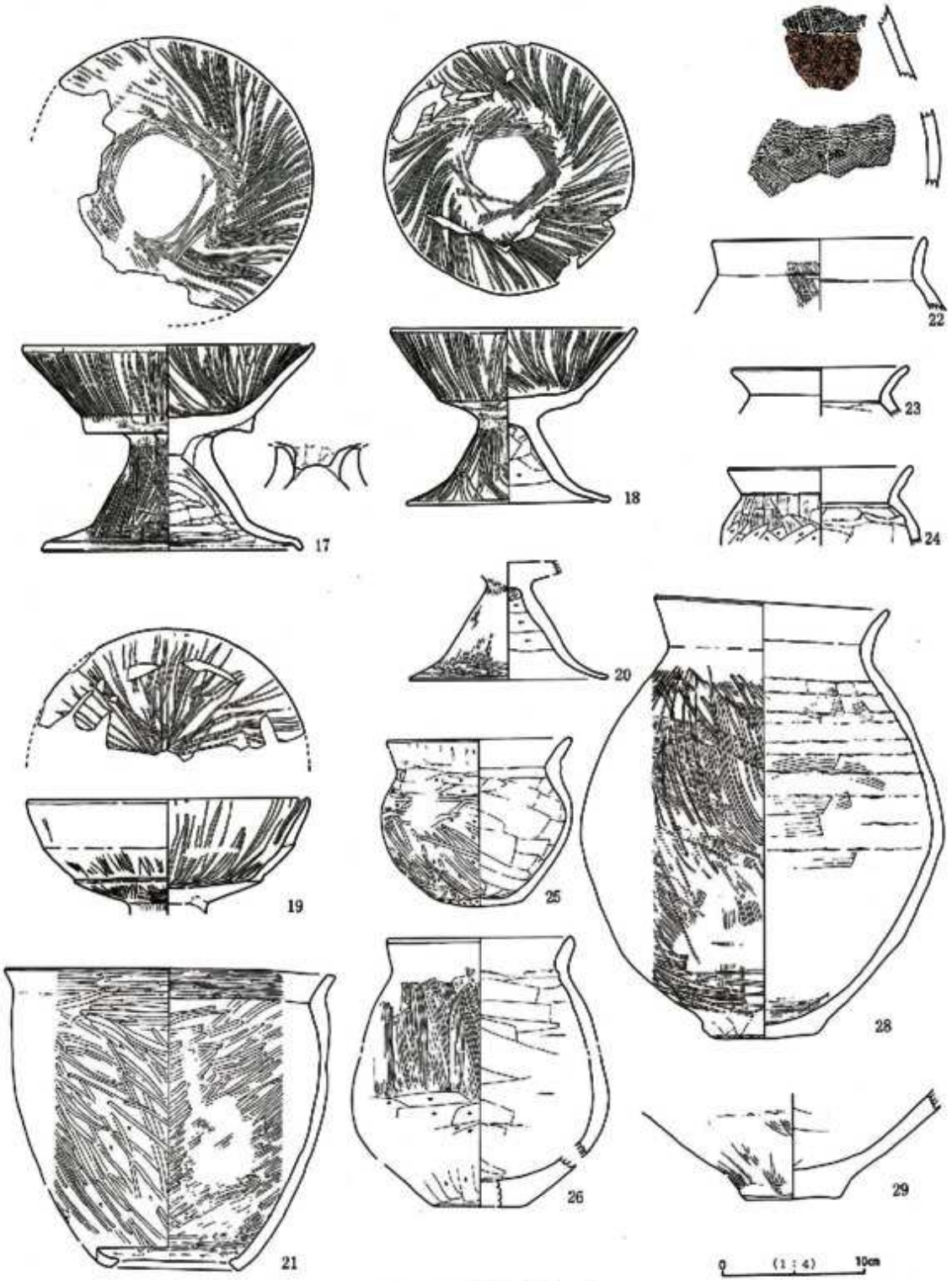
本住居址からは弥生式土器、土師器、鉄製品、古銭が出土している。弥生式土器は、赤色塗彩の壺で、頸部に矢羽根状の文様、甕は頸部に簾状文、胴上半に波状文・斜条痕文を施す甕である。これらはやい時代後期末頃の土器であろう。土師器は杯（１～15）・鉢（16）・高杯（17～20）・小型甕（22～24）・甕（27～29）・甑（21）がある。



第17図　Ｈ８号住居址（１）



第18図　Ｈ８号住居址（２）



第19図　Ｈ８号住居址（３）

1・2の杯は丸底で器高が深く、口縁部が外方に折れるように短く外傾する器形である。2はさらに口縁端部が面とられ、玉縁状になっている。内面は口縁上部が横ナデ、みこみ部はナデ後ミガキ調整され、文様状に暗文が施される。外面は底部2／3までが手持ちのヘラケズリ、上部と口縁部が横ナデ調整される。3は口縁部が短く外反している。外面はミガキ調整され、内面はナデ調整され外反する口縁部だけにミガキが施される。4は深い器形で口縁が稜を持って外方に折れているところは1. 2の杯と似ているが、器肉は厚く、胎土は細かいが石英粒子などの混入物が多く残り、内面底部ナデ、上半部横ナデされるだけだある。3・4は鉢でもよいかしれない。5・6は口縁部の内稜を持って外傾する折れがいくらか緩やかで、短い。内面は全体にミガキ調整後、文様状に暗文を施している。外面も底部ヘラケズリ、上半と口縁部横ナデ後ミガキ調整される。7～13（9は除く）の杯は丸底の底部から口縁端部までそのまま内湾、口縁部はやや内傾気味になる器形である。作りは薄手で内面は底はミガキ上部横ナデ後、暗文を施す。外面は底部ヘラケズリ、口縁部横ナデ後、内面と同様な暗文を施している。11は暗文はない。大・小のセットがある。9は類似するがやや厚く、器肉も均一ではなく、内湾気味の口縁ではあるが直線的である。14・15は須恵器杯蓋の模倣杯で、丸底から中位よりやや下にに外稜を持って屈曲し口縁は直線的に外傾する。口径が後のものと比較して大きい。内外ともミガキ調整をしている。杯は大別すると口縁部が外方に折れるタイプと、全体に内湾するタイプと、須恵器模倣杯の3種類がみられた。高杯は17～18が外面と杯内部に暗文を施すもので、17は杯脚下部端部をつまんで縁を作り出している。脚はラッパ状である。19は杯部中位に外稜を持ち2段階に外傾する。20はミガキ調整はするが暗文はなく、色調もにぶい黄橙で白っぽい。26の小型甕は胴中位より下に最大径をもち、口縁部は「く」字形を呈する。胴部外面の上半はハケ目を残し、下半はヘラケズリされる。26の甕は土中位に最大径を持ち、口縁部は「く」字形を呈し、底部は台状である。胴部外面はミガキが疎らに施される。21の甑は1孔で内外面ミガキが調整される。

これらより古墳時代中期末から後期初頭に位置づけられよう。

第9表　H8号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	土師器 杯	14.4 — 5.4	内　口縁部横ナデ・みこみ部ヘラナデ→暗文・黒色処理 外　口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ	口縁部1/4残存、底部完形 内　N3/0（暗灰） 外　10R6/6（赤橙）	緻密。 1mmの石英・長石粒子含む。	I区
2	土師器 杯	(12.6) — (4.5)	内　口縁部横ナデ・暗文 外　口縁部横ナデ・底部ケズリ	口縁部1/2残存 内　5YR6/4（にぶい橙） 外　5YR6/4（にぶい橙）	緻密。 1mm以下の赤色粒子含む。	カマド IV区掘方
3	土師器 杯	(13.9) — 5.8	内　底部ナデ→口縁部ミガキ 外　ミガキ	口縁部1/8残存 内　5YR5/3（にぶい赤褐） 外　2.5YR5/3（にぶい赤褐）	緻密。 1mm以下の赤色粒子少量含む。	II区3層 堀方
4	土師器 杯	13.4 — 5.6	内　みこみ部ナデ→口縁部横ナデ→底部ヘラナデ 外　口縁部横ナデ・底部ナデ（ササラ状工具使用）→底部ヘラによるナデ	完形 内　5YR6/6（橙） 7.5YR6/6（橙） 外　2.5YR6/3（にぶい赤褐）	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子、赤色粒子含む。	
5	土師器 杯	17.0 — 4.9	内　みこみ部ナデ・口縁部横ナデ→暗文 外　口縁部横ナデ→体部ヘラケズリ→ミガキ	完形 内　7.5YR7/3（にぶい橙） 外　5YR8/4（淡橙） 2.5YR6/6（橙）	緻密。	
6	土師器 杯	14.6 — 5.1	内　横ナデ→放射状暗文 外　口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ→ミガキ	完形 内　2.5YR5/4（にぶい赤褐） 外　2.5YR6/6（橙）	緻密。1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。 内面みこみ部にヘラ記号あり。	
7	土師器 杯	13.2 — 5.2	内　みこみ部ナデ・口縁部横ナデ→暗文状ミガキ 外　口縁部横ナデ→体部ヘラケズリ→暗文	完形 内　7.5YR6/4（にぶい橙） 外　2.5YR7/4（淡赤橙）	緻密。 1mmの赤色粒子、黒色粒子含む。	
8	土師器 杯	13.2 — 5.3	内　みこみ部ナデ・口縁部横ナデ→暗文 外　横ナデ→ミガキ	完形 内　5YR5/4（にぶい赤褐） 5YR6/4（にぶい橙） 外　2.5YR7/6（橙）	緻密。 1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子少量含む。 外面、磨耗。	
9	土師器 杯	13.3 — 5.1	内　みこみ部ナデ・口縁部横ナデ→暗文 外　ミガキ	完形 内　10R6/6（赤橙） 外　10R6/6（赤橙）	緻密。 1mm以下の赤色粒子、黒色粒子含む。	
10	土師器 杯	9.8 — 4.0	内　みこみ部ナデ・口縁部横ナデ→渦巻き状暗文→（黒色処理？） 外　口縁部横ナデ・体部ヘラケズリ→暗文状	完形 内　7.5YR5/2（灰褐） 外　2.5YR6/6（橙）	緻密。 1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子を含む。	

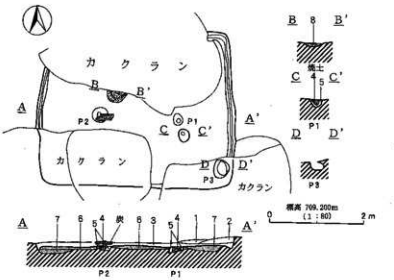
第9表　H8号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
11	土師器 杯	(8.9) — 3.2	内　みこみ部ヘラナデ→口縁部横ナデ 外　口縁部横ナデ・底部ケズリ	口縁部2/3残存 内　2.5YR6/6（橙） 外　2.5YR6/6（橙）	緻密。 1mm以下の石英・長石粒子、赤色粒子を少量含む。	I区
12	土師器 杯	(11.3) — 4.8	内　みこみ部ナデ→口縁部横ナデ→渦巻き状の暗文 外　口縁部横ナデ→底部ヘラケズリ	口縁部1/3残存 内　2.5YR6/4（にぶい橙） 外　2.5YR6/4（にぶい橙）	1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子、石英含む。内面みこみ部にヘラ記号あり。（「×」）	II区3層
13	土師器 杯	(13.2) — 〈3.5〉	内　横ナデ→暗文 外　口縁部横ナデ→ミガキ	口縁部1/4残存 内　2.5YR6/6（橙） 外　2.5YR6/6（橙）	緻密。	I区
14	土師器 杯	16.3 14.0 5.8	内　暗文→（黒色処理？） 外　ミガキ	口縁～底部2/3残存 内　5YR6/4（にぶい橙） 外　5YR6/4（にぶい橙）	1mmの石英・長石粒子、1mm以下の赤色粒子含む。	カマド付近
15	土師器 杯	15.6 — 5.7	内　暗文→（黒色処理？） 外　口縁部横ナデ・底部ヘラケズリ→ミガキ	口縁部4/5残存、底部完形 内　7.5YR3/1（黒褐） 外　2.5YR4/4（にぶい赤褐）	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。	
16	土師器 鉢	(21.0) — 〈5.6〉	内　横ナデ→暗文→（黒色処理？） 外　横ナデ→ミガキ	口縁部1/6残存 内　10YR5/1（褐灰） 外　10YR7/2（にぶい黄橙）	1mm以下の石英・長石粒子多く含む。	I区
17	土師器 高杯	(20.4) (18.3) 14.5	内　杯部　みこみ部ナデ・口縁部横ナデ 　　暗文　脚部　ヘラナデ 外　杯部　口縁部横ナデ 　　脚部　櫛目　暗文 　　脚柱部　暗文	口縁部・底部1/2残存 内　2.5YR7/6（橙） 外　2.5YR7/6（橙）	緻密。 1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子、黒色粒子含む。	I区 I区鮎方 床下 床下D1
18	土師器 高杯	17.4 14.3 12.4	内　杯部　みこみ部ナデ・口縁部横ナデ→暗文状 　　脚部　脚裾部横ナデ→脚柱部ヘラケズリ・ナデ 外　杯部　横ナデ→暗文 　　脚部　脚柱部ナデ・脚裾部横ナデ→（暗文状）ミガキ	ほぼ完形 内　5YR6/4（にぶい橙） 外　5YR7/4（にぶい橙）	緻密。 1mm以下の赤色粒子含む。	III区3・4層 IV区 IV区鮎方 カクラン
19	土師器 高杯	(20.0) — 〈8.1〉	内　みこみ部ナデ・口縁部横ナデ→放射状暗文 外　横ナデ→暗文状ミガキ	口縁部1/2残存 内　2.5YR5/4（にぶい赤褐） 外　2.5YR7/6（橙）	緻密。 1mm以下の赤色粒子少量含む。	I区
20	土師器 高杯	— 13.9 〈8.2〉	内　杯部　ミガキ 　　脚部　櫛部横ナデ→脚柱部横位ヘラケズリ 外　ミガキ	底部3/4残存 内　10YR7/3（にぶい黄橙） 外　10YR7/3（にぶい黄橙）	緻密。1mm以下の赤色粒子、石英・長石粒子少量含む。 外面、脚注部磨耗。	
21	土師器 椀	23.2 9.7 21.1	内　ミガキ 外　口縁部横ナデ・胴部ヘラケズリ→ミガキ	口縁部・底部完形 内　7.5YR6/2（灰褐） 外　10YR8/3（浅黄橙） 　　7.5YR6/4（にぶい橙）	緻密。 1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。	P5、P6
22	土師器 小型甕	— — 〈5.1〉	口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外　口縁部横ナデ→頸～胴部ハケナデ	口縁部1/8残存 内　5YR6/4（にぶい橙） 外　10YR6/2（灰黄褐） 　　5YR6/4（にぶい橙）	1mmの石英・長石粒子多量含む。 1mmの黒色粒子少量含む。 砂質。	IV区 床直
23	土師器 小型甕	(12.6) — 〈3.5〉	口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外　横ナデ	口縁部1/4残存 内　5YR5/2（灰褐） 外　5YR5/2（灰褐）	砂質。 1～2mmの石英・長石粒子多量含む。	カマド 鮎方
24	土師器 小型甕	(13.1) — 〈5.6〉	口縁部ヘラナデ→口縁部横ナデ 外　口縁部横ナデ→胴部ハケナデ→胴中央ヘラケズリ	口縁部1/4残存 内　5YR5/2（灰褐） 外　10YR6/3（にぶい黄橙）	1mmの石英・長石粒子多く含む。	II区3層
25	土師器 小型甕	(13.2) 6.4 11.7	口縁部横ナデ→胴～底部ヘラナデ 外　口縁部横ナデ→頸・底部ヘラケズリ→胴部ミガキ	口縁部1/2残存、底部完形 内　10R5/4（赤褐） 外　10R5/4（赤褐）	1mmの石英・長石粒子多量、黒色粒子少量含む。	
26	土師器 小型甕	(13.2) — —	口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外　口縁部横ナデ→胴部ハケナデ	口縁部1/2残存 内　5YR4/1（褐灰） 外　5YR7/4（にぶい橙）	2mm以下の石英・長石粒子多く含む。1mm以下の黒色粒子を含む。砂質。	
28	土師器 甕	16.5 7.7 31.3	内　胴～底部ハケ状工具によるナデ→口縁部横ナデ 外　口縁部横ナデ・胴部ハケ状工具によるナデ→ミガキ・底部ヘラケズリ	口縁部1/2残存、底部完形 内　5YR5/4（にぶい橙） 外　5YR6/4（にぶい橙）	1mm以下の石英・長石粒子、2mm以下の黒色粒子含む。 5mmの小石含む。	
29	土師器 甕	— 7.0 〈7.4〉	内　ヘラナデ・底部ヘラケズリ（？） 外　胴部ハケナデ 内面磨滅、剥離している。外面磨耗している。	底部完形 内　10YR7/3（にぶい黄橙） 外　10YR7/3（にぶい黄橙）	1mm以下の石英・長石粒子多く含む。 砂質。焼があまい。	

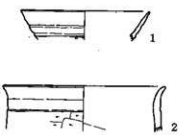
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土位地
30	鉄製品	〈3.8〉	0.6	0.4	4.4	刀子。	
31	古銭	—	—	—	—	「祥○○○」選入品。	

9）Ｈ９号住居址（第20図、第10表、図版５・39）

Ｄあ４グリットにあり、H10号住居址を切る。北と南に攪乱があり、壁の残りも少なく浅いため明確な検出状況ではなかった。ローム層中に構築される。覆土は暗褐色を呈す。H10号住居址との重複した床面はわからなかった。南北長306cm、東西長396cmの長方形を呈す。カマドは攪乱で壊されたものと推定され、北にわずかな焼土範囲がみられた。主軸方位はＮ－５°－Ｗを測る。主柱穴は住居址中位に東西に２個検出された。壁下には周溝が巡っている。柱穴のセクションからみると、住居址は移動しているものと思われるが、明確な地盤のズレはつかみきれていない。



H19 土層説明
1. 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム粒子・パミスを含む。
2. 暗褐色土層 (10YR3/4) ローム粒子・パミスを多量に含む。
3. 黒褐色土層 (10YR3/2) ローム粒子・パミス３mm大・炭化材を含む。
4. 黒褐色土層 (10YR3/2) (住居)
5. 褐色土層 (10YR4/4) ローム主体。（ピット埋方埋土）
6. 褐色土層 (10YR4/4) ローム主体、中央は硬まる。（貼床）
7. 暗褐色土層 (10YR3/4) ブロック状態。
8. 褐色土層 (7.5YR4/6) 焼土。

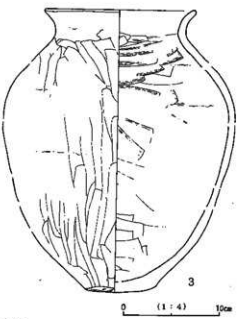


第20図　Ｈ９号住居址

出土遺物には弥生式土器、土師器が少量ある。弥生は赤色塗彩の壺片、擬擬波状文の甕片がある。土師器は土師器杯（１）、鉢（２）、甕がある。

１は有段口縁杯の小片でH10号住居址に帰属し、底部から外稜を持って屈曲し口縁部は外傾、口縁部に沈線に近い段がある、有段口縁杯である。３の甕は口縁部横ナデされ胴部外面がヘラナデ調整されるもので、最大径を胴肩部に持ち、頸部はすぼまり、口縁は短く外反している。胎土は緻密である。

これらから古墳時代後期に位置づけられよう。



第10表　Ｈ９号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位置
1	土師器 杯	(13.6) － (3.1)	内　横ナデ 外　口縁部横ナデ→体部ヘラケズリ 口縁部中央に一条の沈線を施す	口縁部1/8残存 内　7.5YR6/4（淡黄橙） 外　7.5YR6/4（淡黄橙）	きめ細かい。 1mmの赤色粒子含む。	堀方
2	土師器 鉢	(17.2) － (4.8)	内　口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外　口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部1/8残存 内　5YR5/2（灰褐） 5YR1.7/1（黒） 外　5YR6/3（にぶい橙）	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。 小石含む。	カクラン
3	土師器 甕	(15.9) 7.4 30.0	内　口縁部横ナデ→胴～底部ヘラナデ 外　口縁部横ナデ→胴部ナデ→底部ヘラナデ	口縁部1/4、底部2/3残存 内　7.5YR4/1（褐灰） 5YR5/4（にぶい橙） 外　5YR5/2（灰褐）	1mm以下の石英・長石粒子含む。	検出

10）H10号住居址（第21・22・23図、第11表、図版6・7・39・40）

Dいろグリットで検出された。西は調査区域外のため調査できなかった。攪乱に東壁を3カ所壊され、カマドの西側も攪乱される。H9号住居址に切られ、SM3号周溝・H11・H30号住居址を切る。ローム層中に構築され、覆土は黒褐色を呈す。本住居址も床面付近で、50cm程壁が北西に移動しており、床下のローム層中でも柱穴が傾斜し、地盤のズレの状況が顕著である。南北長798cm、東西は残長で800cmを測り、ほぼ方形を呈す。カマドは北壁に残り、やはり西北に移動し、焼土などから見ると2段階の移動の痕跡を残す。主軸方位はN－13°－Wを測る。カマドは煙道が残り、甕が2個同時に使用された様子が窺えた。

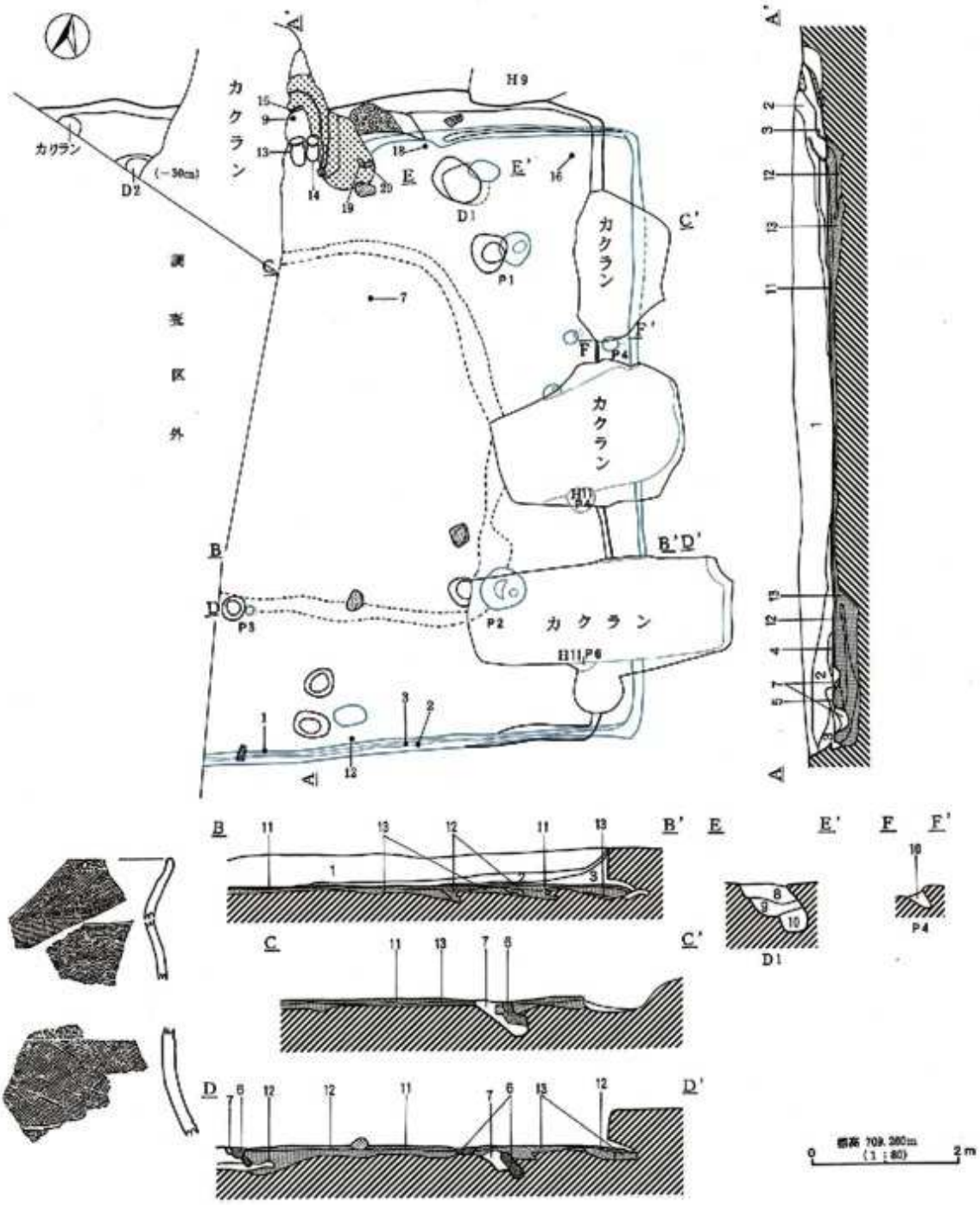
出土遺物には弥生式土器・須恵器・土師器、礫物石が出土している。弥生式土器は拓本に示した壺・甕の他に赤色塗彩された杯・壺がある。SM3号周溝と関連する資料であろうか。

須恵器高杯（1）は杯身部が残り、受け部は細く4mmほど外方に伸び、立ち上がりは内傾し、端部は丸い。内面は横ナデ、外面の底部は2／3程回転ヘラケズりされる。高蔵43型式（TK43）あたりに同様のものがみられる。土師器には杯（2・3）・高杯（4）・鉢（5～8）・小型甕（9）・丸胴甕(10～12)・長胴甕（13～16）がある。2は有段口縁の杯で、薄手の作りで、平底に近い底部から外稜をもち、口縁部は屈曲して中位にわずかな稜を持って外傾する。3は丸底の底部が山成に突出し、口縁部は外稜を持ち屈曲し、口縁部は直立している。杯身模倣の杯であろうか。2は内外面、3は内面のみミガキ調整をしないで黒色処理される。4は高杯脚部で、裾は外方に開き、ラッパ状を呈す。外面に暗文が施される。12の丸胴甕はH6号住居址の3と接合する。淡黄を呈し、胎土は緻密である。13・14の長胴甕はカマドに並んでいたものであるが器形が異なる。13は口縁に最大径を持ち、胴部最大径は胴中位下にもつ。口縁部は直線的に外傾する。14は、口縁部が外半して最大径をもち、そのまま緩やかに径をすぼめて底部に至る。

これらより、本址は古墳時代後期に位置づけられよう。

第11表　H10号住居址出土遺物一覧表

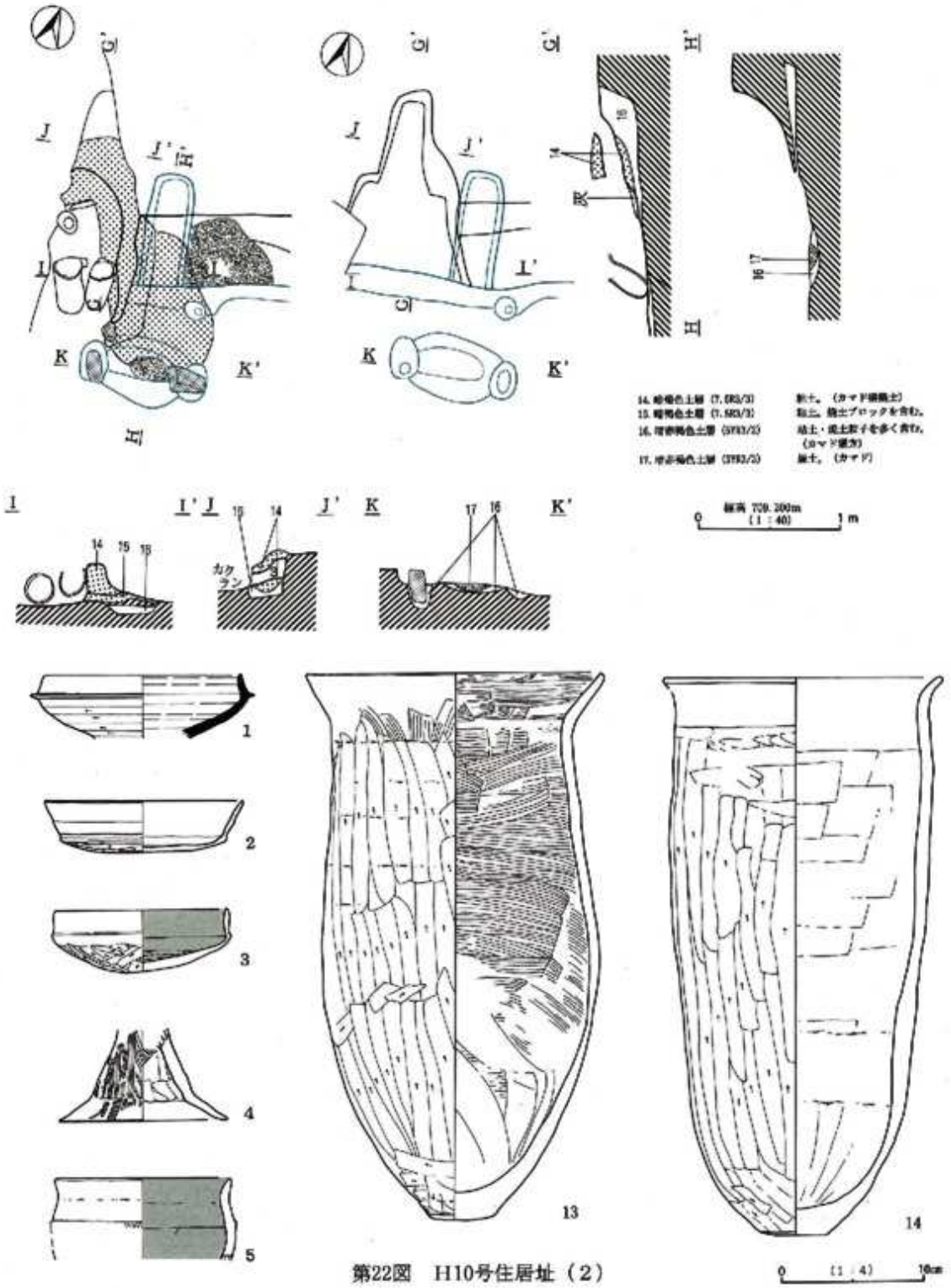
番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	須恵器 高杯	(13.8) － (4.4)	内　ロクロナデ 外　ロクロナデ→杯下部回転ヘラケズり	口縁部1/4残存 内　N7/0（灰白） 外　N7/0（灰白）	1mm以下の石英・長石粒子少量含む。	
2	土師器 杯	(14.0) 11.7 3.6	内　みこみ部ナデ→口縁部横ナデ 外　口縁部横ナデ→底部ヘラケズり →（内外黒色処理？）	口縁部・底部1/2残存 内　5YR2/7/1（黒） 外　5YR7/3（にぶい橙）	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子少量含む。	
3	土師器 杯	12.2 12.5 4.4	内　みこみ部ヘラナデ→口縁部横ナデ →黒色処理 外　口縁部横ナデ・底部ヘラケズり	口縁～底部3/4残存 内　7.5YR2/1（黒） 外　7.5YR7/4（にぶい橙）	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。	
4	土師器 高杯	－ (11.8) (6.4)	内　裾部横ナデ→脚柱部ヘラナデ・ナデ 外　ミガキ	底部1/12残存 内　5YR6/3（淡橙） 外　2.5YR7/4（淡赤橙）	緻密。 1mmの石英・長石粒子、黒色粒子含む。	
5	土師器 鉢	(12.4) － (5.7)	内　胴部ヘラナデ→口縁部横ナデ→黒色処理 外　胴部ハケナデ→口縁部横ナデ	口縁部1/8残存 内　N4/0（灰） 外　5YR6/3（にぶい橙）	緻密。	Ⅰ区1層
6	土師器 鉢	(14.4) － (6.0)	内　口縁部横ナデ・胴部ヘラナデ 外　口縁部横ナデ→胴部ヘラケズり	口縁部1/4残存 内　2.5YR3/1（暗赤灰） 外　2.5YR6/4（にぶい橙）	1mm以下の石英・長石粒子含む。 内面、剥離あり。	床下
7	土師器 小型甕	15.1 8.2 －	内　口縁部横ナデ→胴～底部ヘラナデ 外　口縁部横ナデ→胴・底部ヘラケズり	口縁部・底部完形 内　7.5YR7/4（にぶい橙） 5YR5/2（灰褐） 外　2.5YR6/6（橙） 5YR6/3（にぶい橙）	6mmのチャート他、粗い鉱物多く含む。 外面、磨滅著しい。	Ⅱ区3層
8	土師器 台付鉢	(17.0) (11.0) 15.9	内　鉢部　胴部ヘラナデ→口縁部横ナデ 　　脚部　ヘラナデ 外　鉢部　胴部ヘラケズり→口縁部横ナデ 　　脚部　横ナデ→接合部分にハケナデ	口縁部・底部2/3残存 内　5YR7/4（にぶい橙） 　　2.5YR7/4（淡赤橙） 外　5YR7/4（にぶい橙） 　　5YR8/4（淡橙）	5mm以下の赤色粒子を多量含む。 1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子を少量含む。 内外剥落、磨滅著しい。	Ⅰ区1層 Ⅱ区3層
9	土師器 小型甕	15.2 7.7 15.5	内　口縁部横ナデ→胴～底部ヘラナデ 外　口縁部横ナデ→胴・底部ヘラケズり	ほぼ完形 内　2.5YR6/4（にぶい橙） 外　2.5YR6/4（にぶい橙）	7mm以下のチャートを多く含む。1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。	カマド Ⅰ区堀方
10	土師器 甕	－ (8.9) (3.2)	内　ヘラナデ→部分的にミガキ 外　胴・底部ミガキ	底部1/4残存 内　10YR5/1（褐灰） 外　2.5YR6/4（にぶい橙）	0.5mm以下の石英・長石粒子含む。	P4
11	土師器 甕	－ (6.0) (7.3)	内　ヘラナデ 外　胴部ヘラナデ・底部ヘラケズり	底部1/2残存 内　7.5YR5/1（褐灰） 外　5YR7/3（にぶい橙）	8mm以下の小石多く含む。	



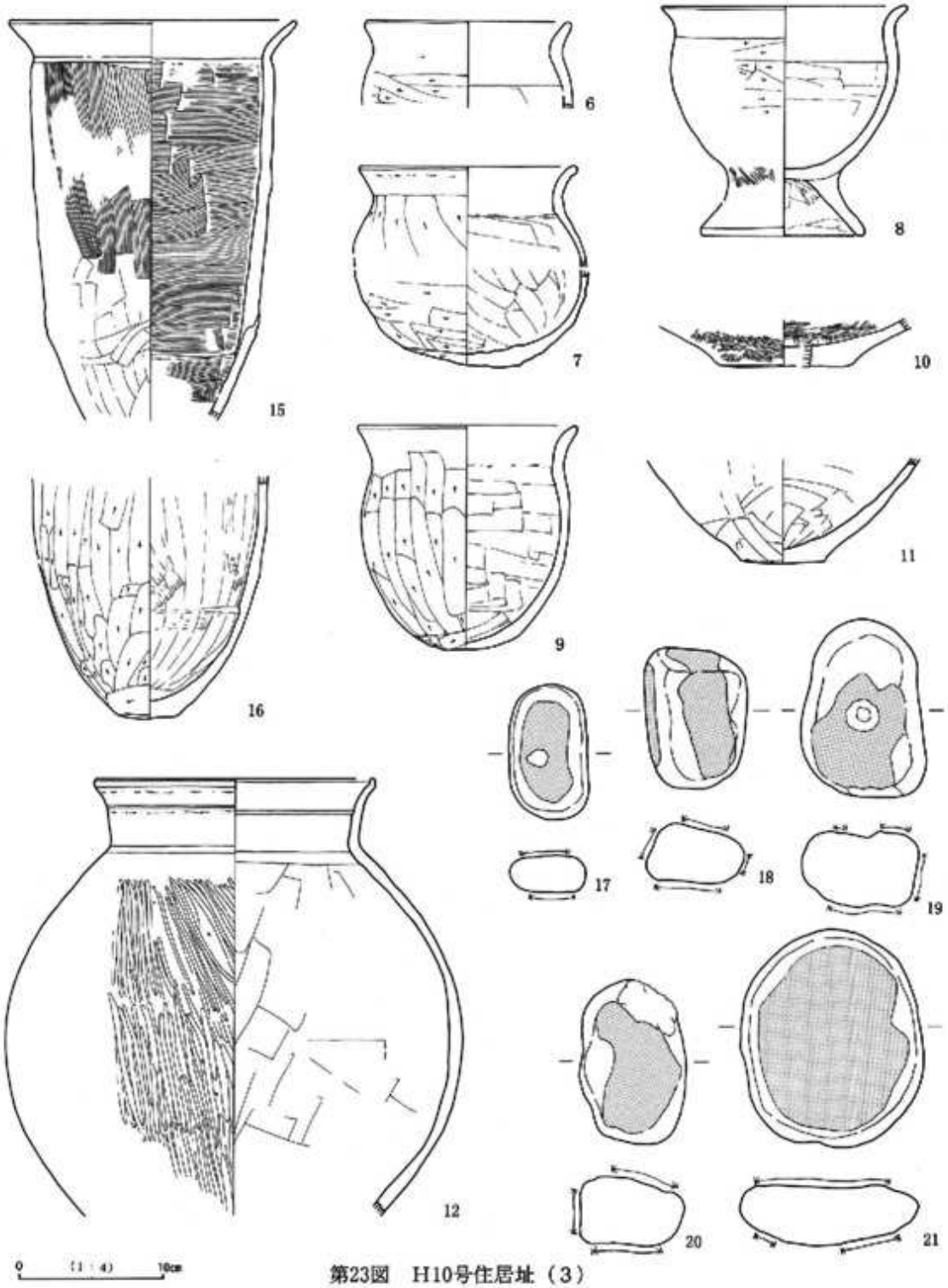
H10 土層説明

1. 黒褐色土層 (10YR3/2) ローム粒子・パミスを多く含む。
2. 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム粒子・パミスを多く含む。
3. 黒褐色土層 (10YR2/2) ローム粒子・パミスを多く含む。カマド付近焼土・灰を多く含む。
4. にぶい暗色土層 (7.5YR5/4) 下部に炭化物の堆積あり。
5. 暗褐色土層 (10YR3/4) ローム粒子を多く含み、パミス5mm大を含む。
6. 暗褐色土層 (10YR3/3) (粘質)
7. 暗褐色土層 (10YR3/4) パミス・ロームブロックを含む。(ピット埋土相当)
8. 暗褐色土層 (10YR3/4) ローム粒子を多く含み、パミスを含む。(D1)
9. 暗褐色土層 (7.5YR3/4) ローム粒子・パミス多量に含む。(D1)
10. 暗褐色土層 (10YR3/4) ローム粒子・パミスを含む。(D1)
11. 暗褐色土層 (10YR3/4) ローム主体に暗褐色土ブロックを含む。(BBK)
12. 黒褐色土層 (10YR2/3) ロームブロックと混在。
13. にぶい暗色土層 (7.5YR5/4) ローム。

第21図　H10号住居址（1）



第22図　H10号住居址（2）



第23図　H10号住居址（3）

第11表　H10号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
12	土師器 甕	(19.5) — 〈30.5〉	内　頸部ヘラナデ→口縁部横ナデ 口縁部中央に沈線を一条施す。 外　頸部ヘラケズリ→ミガキ→口縁部横ナデ 口縁部に沈線一条を施す。	口縁部3/4残存 内　2.5YR/3（淡黄） 外　2.5YR/3（淡黄）	緻密。 1mmの赤色粒子、黒色粒子含む。	P 4、検出
13	土師器 甕	21.0 5.0 38.4	内　ハケナデ 外　口縁部横ナデ→胴・底部ヘラケズリ	ほぼ完形 内　7.5YR/7.4（にぶい橙） 外　5YR/7/3（にぶい橙）	緻密。 2mm以下の赤色粒子、黒色粒子含む。	カマド カマド周辺
14	土師器 甕	(19.6) 5.0 39.2	内　口縁部横ナデ→胴～底部ヘラナデ 外　口縁部横ナデ→胴部ヘラケズリ→一部ナデ・底部ヘラケズリ	口縁部1/3残存、底部完形 内　7.5YR/7/3（にぶい橙） 外　10YR/7/3（にぶい黄橙）	2mm以下の石英・長石粒子含む。 3mm以下の赤色粒子多く含む。	カマド
15	土師器 甕	(20.0) — 〈27.7〉	内　口縁部横ナデ・胴部ハケメ 外　胴部上半ハケメ・胴下半ヘラナデ→口縁部横ナデ	口縁部1/11残存 内　5YR7/4（にぶい橙） 外　5YR8/4（淡橙）	2mm以下の赤色粒子含む。	カマド III区2層
16	土師器 甕	— 4.0 〈16.8〉	内　ハケナデ→ヘラナデ 外　胴・底部ヘラケズリ	底部完形 内　5YR6/4（にぶい橙） 外　5YR7/4（にぶい橙）	1mmの石英・長石粒子、黒色粒子含む。	

番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土位地
17	礫物石	9.5	5.6	2.7	225	安山岩。擦面あり。	
18	礫物石	9.8	7.7	4.2	380	安山岩。擦面あり。	
19	礫物石	12.4	8.6	5.4	730	多孔質安山岩。凹あり。擦面あり。	
20	礫物石	11.3	7.4	4.8	525	安山岩。擦面あり。	
21	石皿	15.2	12.7	4.3	1,190	安山岩。擦面あり。	

11）H11号住居址（第24図・第12表、図版7・40・57）

Dあ5グリットにあり、西を撹乱と、H10号住居址に切られる。ローム層中に構築され、覆土は黒褐色を呈す。焼失家屋で、炭化材が多く検出された。カマドは北壁にあったと推測されるが撹乱により壊されたようである。南北478㎝、東西452㎝と南北にやや長いが方形を呈す。主軸方位はN－16°－Wを測る。本住居址も地盤のズレのため、床面近くで30㎝ほど西にズレていた。また床下で60㎝のズレがみられた。主柱穴は4本で、南に出入り口のピットが検出された。

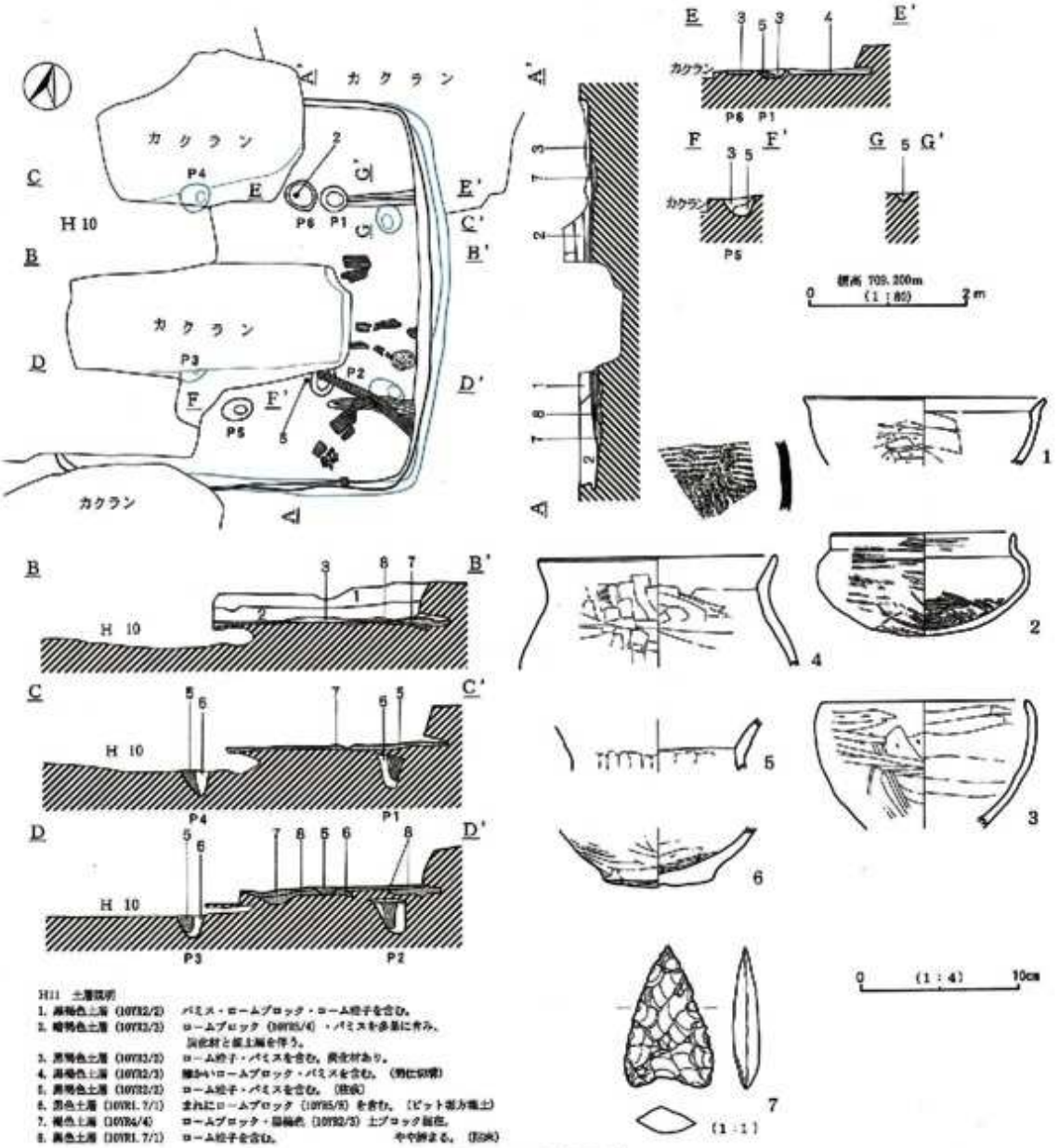
出土遺物には須恵器、土師器、石鏃（7、黒曜石製）がある。須恵器甕（拓本）は陶邑産と胎土分析される。土師器は杯（1・2）・鉢（3）・小型甕（4～5）がある。1は口縁部が内稜を持って短く外方に折れるものである。2は鉢としてもよいが扁平で丸い体部から口縁が短く直立するものである。内外ミガキ調整される。4の甕は口縁部が「く」字状に外傾する。

これらより、古墳時代中期末～後期初頭に位置づけられよう。

第12表　H11号住居址出土遺物一覧表

番号	器種	法量	成形・調整	残存量・色調	胎土・特徴	出土位地
1	土師器 杯	15.4 — 〈4.3〉	内　口縁部横ナデ→体部ヘラナデ 外　口縁部横ナデ→体部ヘラケズリ	口縁部1/12残存 内　10YR/7.3（にぶい黄橙） 外　7.5YR6/2（灰褐）	緻密。 1mm以下の石英・長石粒子少量含む。	II区
2	土師器 杯	(11.8) — 6.5	内　ミガキ 外　ミガキ	口縁～底部1/2残存 内　10YR6/4（にぶい橙） 外　2.5YR6/6（橙）	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。 内面、磨滅している。	p 6
3	土師器 鉢	(13.0) — 〈8.1〉	内　口縁部横ナデ→体部ヘラナデ 外　口縁部横ナデ→体部ヘラケズリ→部分的にミガキ（？）	口縁部1/4残存 内　7.5YR6/6（橙） 外　7.5YR6/6（橙）	きめが粗い。 1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。	I区2層
4	土師器 甕	(15.4) — 〈7.0〉	内　口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ 外　口縁部横ナデ→胴部ヘラナデ	口縁部1/8残存 内　7.5YR5/2（灰褐） 外　7.5YR7/2（明褐灰）	きめが粗い。 2mm以下の石英・長石粒子多く含む。	
5	土師器 小型甕	— — 〈3.3〉	内　口縁部横ナデ→胴部ナデ 外　口縁部横ナデ→頸部ナデ	口縁部1/4残存 内　2.5YR6/6（明赤褐） 5YR2/1（黒褐） 外　2.5YR5/2（灰赤） 2.5YR2/1（赤黒）	1mm以下の石英・長石粒子含む。	
6	土師器 甕	— (7.0) 〈3.7〉	内　ヘラケズリ・ヘラナデ 外　頸下半部ヘラナデ・底部ヘラケズリ	底部1/2残存 内　5YR2/1（黒褐） 外　5YR6/2（灰褐） 5YR7/3（にぶい橙）	1mm以下の石英・長石粒子、黒色粒子含む。 小石含む。	IV区2層

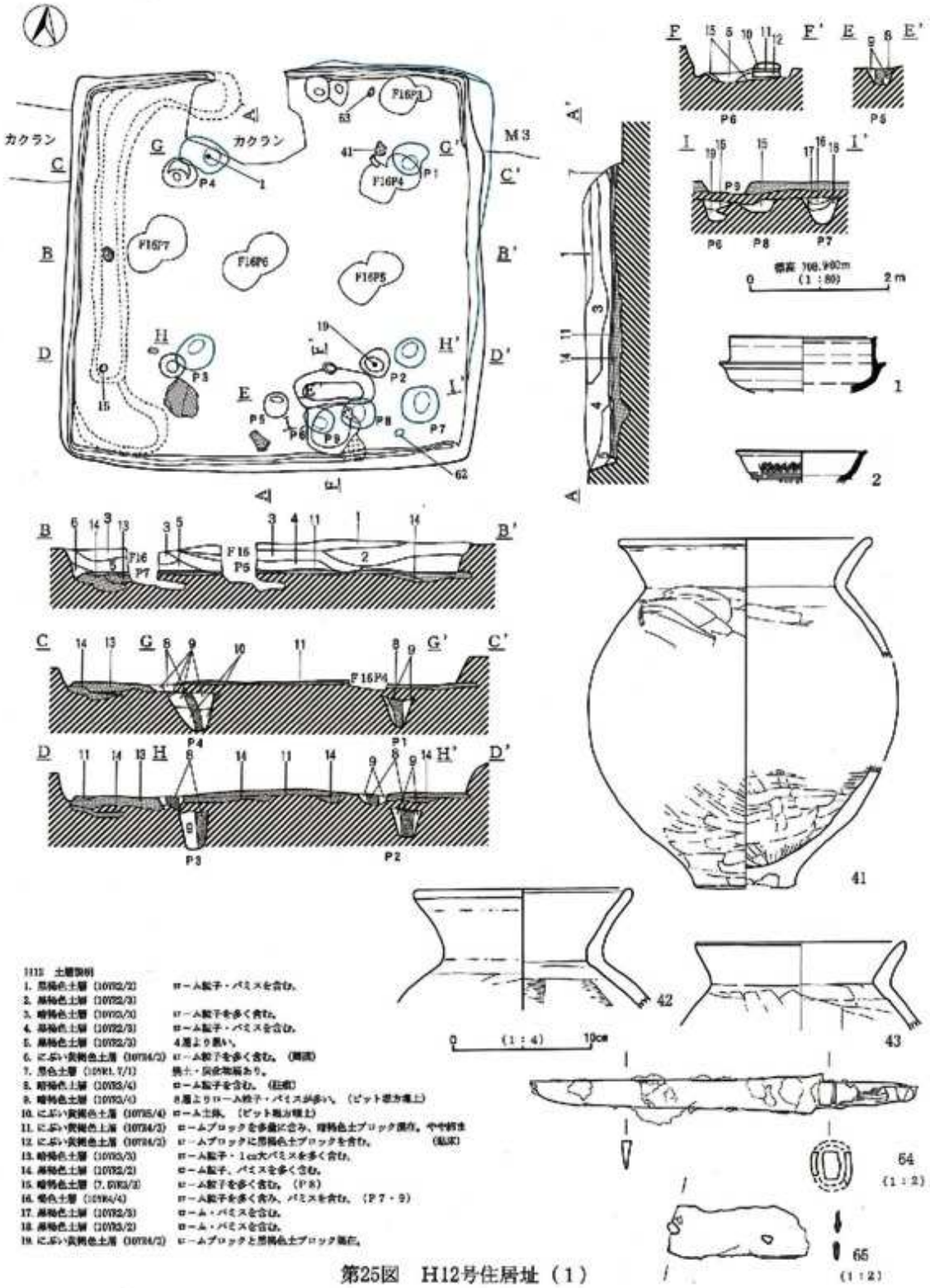
番号	種類	長さ	巾	厚さ	g	備考	出土位地
7	石鏃	2.3	1.4	0.4	1.0	黒曜石。	



第24図　H11号住居址

12）H12号住居址（第25～27、第13表、図版７・41～43）

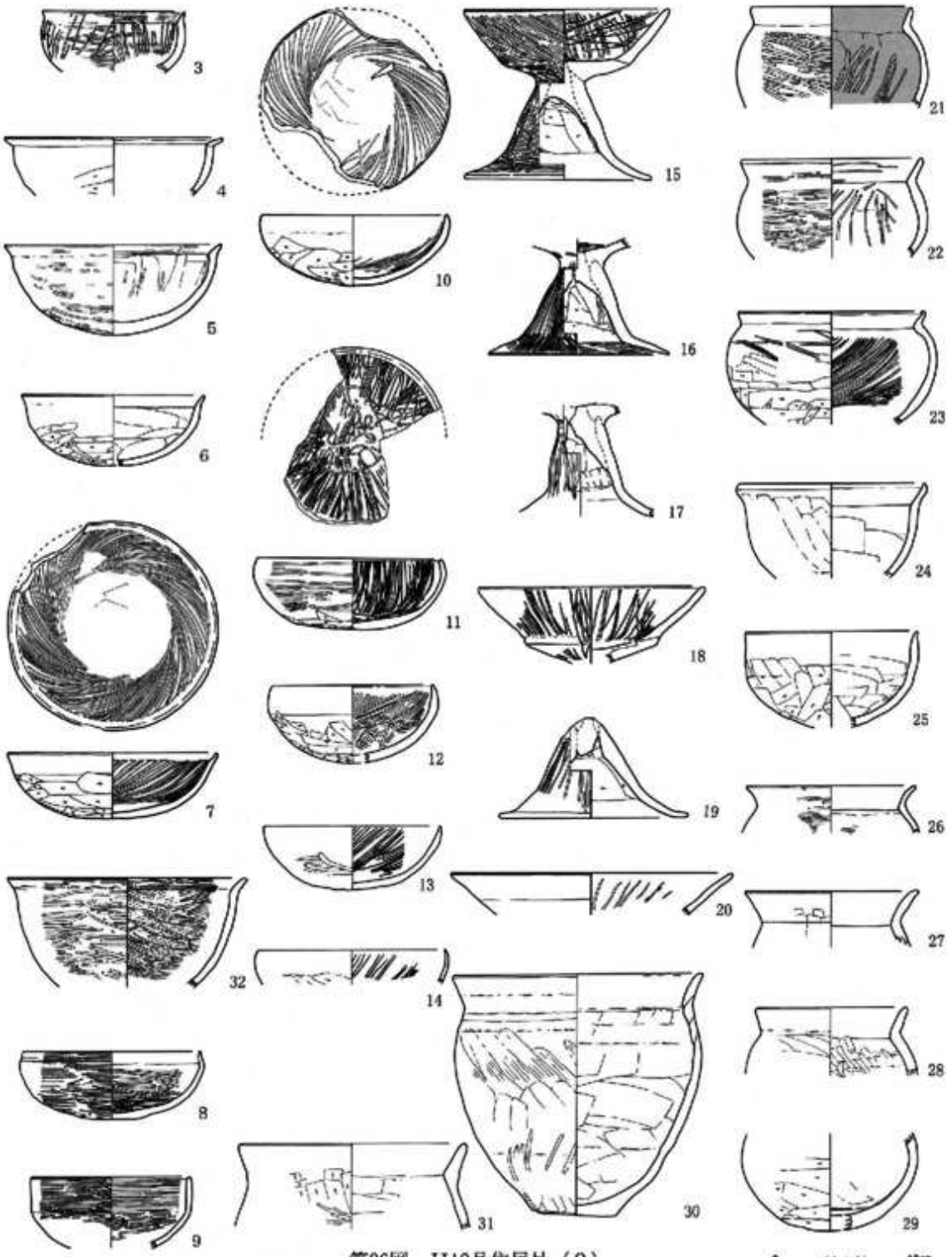
Ｃく10グリットにあり、Ｆ16号掘立柱建物址、Ｍ３号溝址に切られる。北にある攪乱によりカマド付近は破壊される。ローム層中に構築され、覆土は黒褐色を呈す。本住居址も地盤のズレが看取され、床面付近で最大30cm また床下では40cm 程のズレがあった。主柱穴はＰ１～Ｐ４の４本である。南壁下中央よりやや東寄りにＰ６があり、ピットに接して北周に小提を持っている。そのピットの南には粘土が置かれていた。この粘土の成分に近い胎土を持つ土師器が胎土分析の結果、土師器Ⅲ類とされこの期の杯類で占められる。工作用のピットあろうか。



H12 土層説明

1. 黒褐色土層 (10YR2/2) ローム粒子・パミスを含む。
2. 黒褐色土層 (10YR2/3)
3. 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム粒子を多く含む。
4. 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム粒子・パミスを含む。
5. 黒褐色土層 (10YR2/3) 4層より黒い。
6. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) ローム粒子を多く含む。（開墾）
7. 黒色土層 (10YR1.7/1) 焼土・炭化物痕あり。
8. 暗褐色土層 (10YR3/4) ローム粒子を含む。（柱根）
9. 暗褐色土層 (10YR3/4) 8層よりローム粒子・パミスが多い。（ピット埋土）
10. にぶい黄褐色土層 (10YR5/4) ローム土塊。（ピット埋土）
11. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) ロームブロックを多量に含み、暗褐色土ブロック混在。やや軟質
12. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) ロームブロックに黒褐色土ブロックを含む。（貼床）
13. 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム粒子・1cm大パミスを多く含む。
14. 黒褐色土層 (10YR2/2) ローム粒子、パミスを多く含む。
15. 暗褐色土層 (7.5YR3/3) ローム粒子を多く含む。（P8）
16. 褐色土層 (10YR4/4) ローム粒子を多く含み、パミスを含む。（P7・9）
17. 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム・パミスを含む。
18. 黒褐色土層 (10YR2/2) ローム・パミスを含む。
19. にぶい黄褐色土層 (10YR4/2) ロームブロックと黒褐色土ブロック混在。

第25図　H12号住居址（1）



第26図　H12号住居址（2）